

# 中学校基礎学力調査結果分析

# 目 次

## 平成16年度 中学校基礎学力調査

1	目的	-----	67
2	調査対象及び実施教科	-----	67
3	実施期日	-----	67
4	調査問題作成の基準及び方針	-----	67
5	調査集計の方法	-----	67
6	調査結果の分析	-----	67
7	調査結果の概要	-----	68

## 各教科の分析結果

(1)	国語		
	調査問題の構成とねらい	-----	71
	平均点	-----	71
	小問ごとのねらいと正答率	-----	71
	標準解答，正答率，誤答例，考察	-----	72
(2)	社会		
	調査問題の構成とねらい	-----	81
	平均点	-----	81
	小問ごとのねらいと正答率	-----	81
	標準解答，正答率，誤答例，考察	-----	82
(3)	数学		
	調査問題の構成とねらい	-----	89
	平均点	-----	89
	小問ごとのねらいと正答率	-----	89
	標準解答，正答率，誤答例，考察	-----	90
(4)	理科		
	調査問題の構成とねらい	-----	99
	平均点	-----	99
	小問ごとのねらいと正答率	-----	99
	標準解答，正答率，誤答例，考察	-----	100
(5)	英語		
	調査問題の構成とねらい	-----	111
	平均点	-----	111
	小問ごとのねらいと正答率	-----	111
	標準解答，正答率，誤答例，考察	-----	112

## 学習状況実態調査

1	調査内容	-----	121
2	調査結果及び結果分析	-----	123

## 平成16年度 中学校基礎学力調査

### 1 目的

本県中学生の基礎学力の定着状況について総合的に調査研究を行い，その実態を把握，分析するとともに，学習指導上の問題点を明らかにし，今後の教育課程の編成・実施及び指導方法の改善に資する。

### 2 調査対象及び実施教科

#### (1) 調査対象

県内の公立中学校の中で本調査を希望するすべての学校を対象とし，第2学年で実施する。

#### (2) 実施教科

国語，社会，数学，理科，英語の5教科を実施する。

実施時間は，各教科50分で実施する。

### 3 実施期日

調査の実施期日は，原則として平成16年10月27日（水），10月28日（木）の両日とする。

調査実施日	調査教科
平成16年10月27日(水)	国語(50分・聞き取り問題を含む) 社会(50分) 数学(50分)
10月28日(木)	理科(50分) 英語(50分・リスニング問題を含む)

### 4 調査問題作成の基準及び方針

#### (1) 調査問題作成の基準

中学校学習指導要領に示されている各教科の目標に即し，県内で使用されている教科書に準拠して，問題を作成する。

#### (2) 調査問題作成の方針

ア 中学校学習指導要領に示されている各教科の目標及び内容に基づき，基礎的・基本的な内容について出題する。

イ 出題に当たっては，理解力，思考力，判断力，表現力を総合的にみるこ  
とができるようにし，単に知識を問う内容とならないよう配慮する。

ウ 特定の分野や内容に偏ることなく，広い範囲から出題し，中学校学習指  
導要領に示された内容について取扱いの趣旨を十分考慮する。

エ 調査結果が，今後比較検討できるような内容にする。

### 5 調査集計の方法

(1) 調査実施校より，調査集計表，各教科小問別集計表を回収し，調査人数，平均点，小問別正答率，誤答例等を集約する。

(2) 学習の実態を把握するための「学習と生活に関するアンケート」も併せて実施する。

(3) 各教科小問別集計表と，「学習と生活に関するアンケート」のサンプル数は，いずれも各学校1学級当たり5名分とする。その抽出に当たっては，男女合わせた無作為抽出とする。なお，在籍数が5名以下の場合は，全員分とする。

### 6 調査結果の分析

(1) 各小問別の正答率や主な誤答例を中心に分析し，調査結果に関する考察や指導上の留意点をまとめる。

(2) 調査対象学年について，調査結果の収集・分析を行い，学習の定着状況を把握し，今後の指導に役立てる。

(3) 基礎学力の定着状況を把握し，今後の教育施策に生かす。

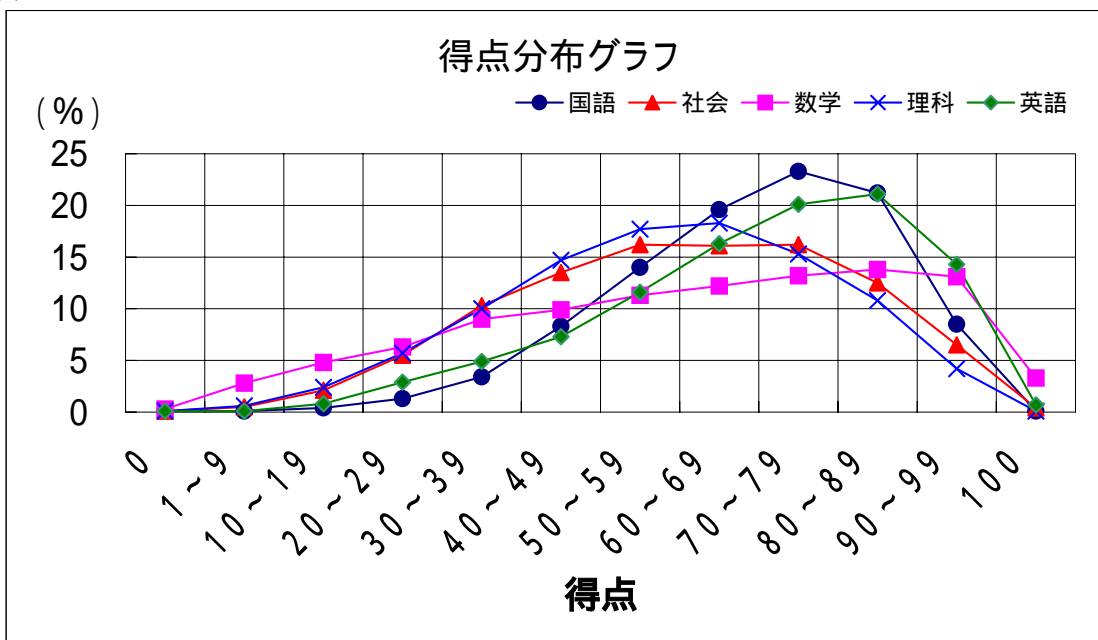
7 調査結果の概要

(1) 調査実施校 144校(五ヶ瀬中等教育学校, 宮崎大学教育文化学部附属中学校を含む)

(2) 平成16年度 中学校基礎学力調査結果 得点分布表(県全体)

	国語		社会		数学		理科		英語	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
100	10	0.1	43	0.4	377	3.3	10	0.1	75	0.7
90～99	977	8.5	756	6.6	1510	13.1	488	4.2	1641	14.3
80～89	2441	21.1	1446	12.6	1590	13.8	1244	10.8	2426	21.1
70～79	2680	23.2	1876	16.3	1524	13.2	1762	15.3	2311	20.1
60～69	2254	19.5	1858	16.1	1402	12.2	2115	18.4	1872	16.3
50～59	1609	13.9	1869	16.2	1298	11.3	2035	17.7	1330	11.6
40～49	955	8.3	1554	13.5	1138	9.9	1698	14.8	840	7.3
30～39	389	3.4	1195	10.4	1034	9.0	1148	10.0	561	4.9
20～29	145	1.3	640	5.6	726	6.3	662	5.8	330	2.9
10～19	46	0.4	241	2.1	553	4.8	277	2.4	91	0.8
1～9	11	0.1	55	0.5	323	2.8	74	0.6	17	0.1
0	9	0.1	16	0.1	34	0.3	16	0.1	7	0.1
受検者数	11526		11549		11509		11529		11501	
総得点	8E+05		693446		704499		668087		798400	
最高点	100		100		100		100		100	
最低点	0		0		0		0		0	
平均点	68.5		60.0		61.2		57.9		69.4	

(3) 得点分布グラフ(県全体)



(4) 各教育事務所調査人数

事務所	国語	社会	数学	理科	英語
宮崎	3756	3771	3748	3761	3746
南那珂	922	923	922	919	920
北諸県	2136	2142	2139	2137	2135
西諸県	936	936	933	936	935
児湯	1100	1101	1097	1100	1095
東白杵	2230	2233	2226	2231	2224
西白杵	245	245	245	244	245

# 各教科の分析結果

## 中学校第2学年

### (1) 国語

#### 分析結果の表記について

「小問ごとのねらいと正答率」の評価の欄の については、県正答率と予想正答率との差を記号化して示している。

- 1 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上高いもの.....
- 2 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上低いもの.....
- 3 1と2の間にあるもの .....

「小問ごとのねらいと正答率」の比較の欄の「H15」「全国」については、過去の基礎学力調査問題や全国教育課程実施状況調査問題と同一問題、類似問題であることを示している。

- 1 H15 ~平成15年度基礎学力調査問題と同一または類似問題
- 2 全国~平成13年度全国教育課程実施状況調査問題と同一または類似問題  
正答率と誤答率は、抽出調査した全人数に対する割合を表している。

誤答例については、抽出調査した中で、割合の高かったものを中心に記載している。



# (1) 国語

調査問題の構成とねらい

- ・ 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の領域と〔言語事項〕の3領域1事項についての基礎的、基本的な力をみる問題とした。
- ・ 聞き取り、文学的文章、説明的文章、古典、韻文、言語事項の6分野から出題した。
- ・ 理解力、思考力、判断力及び表現力を総合的にみることができるよう配慮した。

平均点 68.5点

小問ごとのねらいと正答率

大問	分野	小問	内 容・ね ら い	主な領域・事項	大問別正答率	小問別正答率	予想正答率	評価	比較	
二	聞き取り	1	話の要点をとらえながら聞き、内容を正確に聞き取ることができる。	話	86.2	94.5	70		全国	
		2	話の要点をとらえながら聞き、話の内容を聞き分けることができる。	話		96.6	70			
		3	話題の展開に即して、話の内容を正確に理解することができる。	話		70.4	60			
		4	内容を正確に聞き取ることができる。	話		83.1	75			
三	文学的文章	1	文脈に即して、適切な副詞を補充できる。	読	87.2	87.4	90			
		2	A	文脈に即して、登場人物の会話文を推察できる。		読	94.9	80		H15
			B	文脈に即して、登場人物の会話文を推察できる。		読	93.9	80		H15
		3	人物の描写に注意して、適切な一文を抜き出すことができる。	読		62.6	80			
4	文章の要旨をとらえて、心情を理解することができる。	読	97.0	90						
三	説明的文章	1	論理の展開をとらえて、適切な接続詞を選択できる。	読	63.7	79.7	80		H15	
		2	文章の展開をとらえて、適切な言葉でまとめることができる。	書		69.5	50			
		3	文章の展開をとらえて、適切な言葉を抜き出すことができる。	読		39.7	60			
		4	文章の展開に即して、内容をとらえることができる。	読		65.7	60		全国	
四	古典	1	文語を現代仮名遣いに書き直すことができる。	書	68.6	55.7	70		H15	
		2		文章の展開に即して、適切な言葉を抜き出すことができる。		読	69.5	80		
				文章の展開に即して、適切な言葉を抜き出すことができる。		読	71.3	80		
3	文章の展開をとらえて、故事成語の意味を指摘することができる。	読	78.0	80						
五	韻文	1	(1)	鑑賞文の内容に即して、適切な言葉を抜き出すことができる。	読	67.8	40.8	55		
			(2)	鑑賞文の内容に即して、適切な言葉を抜き出すことができる。	読		78.3	70		
		2	ア	短歌の内容をとらえて読むことができる。	読		61.9	70		
			イ	短歌の内容をとらえて読むことができる。	読		68.4	70		
ウ	短歌の内容をとらえて読むことができる。	読	89.6	75						
六	言語	1	主語・述語の関係を理解して、指摘できる。	言	54.8	74.2	50		H15	
		2	品詞の区別が的確にできる。	言		41.0	60		H15	
		3		正しい筆順で書くことができる。		言	46.7	40		
				正しい筆順で書くことができる。		言	27.9	35		
	4		漢字の部首を指摘できる。	言		49.9	50			
			漢字の部首を指摘できる。	言		71.5	55			
	5		これまでに習った漢字を読むことができる。	言		96.0	80		全国	
			これまでに習った漢字を読むことができる。	言		46.1	70			
			これまでに習った漢字を読むことができる。	言		47.5	55			
	6		これまでに習った漢字を書くことができる。	言		60.0	50			
		これまでに習った漢字を書くことができる。	言	25.4	35					
		これまでに習った漢字を書くことができる。	言	71.2	70					

領域・言語事項の「話」は「話すこと・聞くこと」、「書」は「書くこと」、「読」は「読むこと」、「言」は「言語事項」を表している。

一 正答率 (86.2%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	スケーター	94.5	全国61.4 類似	アメンボスケーター(2.3)
2	イ	96.6		ア(2.4)
3	エ	70.4		ウ(18.6) イ(7.9)
4	おぼれてしま	83.1		しずむ(12.2) 水面に浮けない(2.0)

< 考察 >

話の要点を的確に聞き取る力を問う問題である。

「あめんぼ」が水に浮いていられる理由について述べられた内容であったが、全体的に正答率は高かった。比較的、平易な文章であることから、理解しやすかったものと思われる。

- ・ 「放送の内容を正確に聞き取る」ことをねらいとした問1については、正答率が全国教育課程実施状況調査と比べて高かった。全国教育課程実施状況調査では、全体を正確に把握する必要があったが、本調査では問題文の冒頭に答えがあり、答えやすかったためと考えられる。また、「話の内容を聞き分けることができる」ことをねらいとした問2も、正答率が高かった。これも問題文の冒頭に答えがあり、イメージがつかみやすかったためと考えられる。
- ・ 「話の内容を正確に理解することができる」ことをねらいとした問3については、「水面のまくが破れない理由」に関して問うているのに対し、「水面に浮いていられる理由」について答えているものが多かった。答えを考える際に参考となる、「あしの先にするどいつめが前向きに出ています。」という箇所が、問題文の最後の部分にあり、後半の聞き取りが不十分であったためと思われる。また、「適当でないものを一つ選ぶ」という設問の指示をよく読んでおらず、「適当なもの」を選んだ生徒もいたと考えられる。
- ・ 「内容を正確に聞き取ることができる」ことをねらいとした問4については、「しずむ」という誤答が多かった。これは、問題文にはない表現であることから、生徒自身が設問から推測して答えたものではないかと思われる。問3と同じく、答えが問題文の最後にあるので聞き取りが不十分だったことと、内容を正確に聞き取らず、自分で勝手に判断してしまったことが考えられる。

そこで、指導に当たっては、ふだんの授業において目的や場面に応じて的確に聞く能力を育成するために、次のような点に力を入れて取り組む必要がある。

「聞き取り問題」を定期試験や授業で行い、話の展開の筋道を全体的にとらえながら、要点を正確に聞き取ることに慣れさせる。

「聴写(教師が読み上げたものを生徒がそのまま書き取る)」を、授業の中に継続的に取り入れ、正確に聞き取る練習をさせる。その際、説明的文章においては、どこが事実でどこが意見なのかを意識させ、事実と意見とを聞き分けさせる。

人の話を聞く機会を多くし、話を聞きながら適切なメモをとる練習をさせる。

具体的な例～講演会や立志式の講話などの行事。総合的な学習の時間における校外学習でのインタビュー。



二 正答率 (87.2%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	イ	87.4		ア(7.1) 工(4.2)
2	A	94.9	H15 92.1 類似	工(1.7) ア(1.7) ウ(1.7)
	B	93.9		ア(5.3)
3	送信機を卵のすぐ近くへ置いて	62.6		送信機の卵のすぐ近くへ置いた(20.5) ひなが残した卵の殻を手渡した(12.7)
4	ア	97.0		工(1.0) イ(1.0) ウ(1.0)

<考察>

文学的文章の読解力を問う問題である。

全体的に正答率が高かった。チャボの卵の孵化を通しての、先生と生徒とのやりとりという親しみやすい内容であったこと、さらに、リード文があることにより、話の展開が把握しやすくなり、正答率の高さにつながったものと考えられる。

- ・ 「文脈に即し適切な副詞を補充できる」ことをねらいとした問1は、正答率が高かった。また、昨年度と同じく「文脈に即して登場人物の会話文を推察できる」ことをねらいとした問2についても正答率が高かったことから、話の展開をよく理解できていたことが分かる。
- ・ 「人物の描写に注意して適切な一文を抜き出すことができる」ことをねらいとした問3は、正答率が低かった。答えとなる箇所を指摘できてはいるが、「送信機を」と書くべきところを「送信機の」と書いたり、「卵の」が抜けていたり、抜き出す際の誤記が多かったためと考えられる。また、「紺野先生がとった行動」とは違う箇所を答えるなど、設問を踏まえていない答えも見られた。
- ・ 問4は特に正答率が高かった。「文章の要旨をとらえて、心情を理解することができる」というねらいの問いであるが、少年の気持ちについて説明している設問の条件文が易しかったため、心情を推測できたものと思われる。

そこで、指導に当たっては、文学的文章を読み、内容を的確に理解する能力を高めるために、次のような手立てが考えられる。

文(文章)を正確に読む力を身に付けさせるために、繰り返し音読させたり、一文一文を正確に視写させたりする。

具体的な例～班単位で、一文読みを行う。

定期試験やプリント学習において、答え方に条件が付いているときは、設問の文章を注意深く読み、答え方の条件を見落とさないように、機会をとらえて繰り返し指導をする。

具体的な例～題名読みや情景描写と心情描写の違いに着目した読みを行う。

情景描写の読み取りとともに、登場人物の行動や会話を文脈に沿って丁寧に読み取らせる。

三 正答率 (63.7%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	エ	79.7	H15 86.8 類似	ア(15.3) イ(3.2)
2	調教師を喜ばせ、自分も精いっぱい生きることを楽しむため。	69.5		文末の間違い(15.7) 生きることを楽しむため(10.5) 自分も精いっぱい生きることを楽しむため(3.2)
3	強制	39.7		知性(35.6) 意志(12.1) 能力(10.1)
4	ウ	65.7	全国 67.4 類似	エ(20.2) イ(10.3)

< 考察 >

説明的文章の読解力を問う問題である。

- ・ 「論理の展開をとらえて適切な接続詞を選択できる」ことをねらいとした問1は、昨年度より7.1ポイントほど低かったものの約80%の正答率であった。段落と段落の流れをおさえる力はある程度定着していると言える。「文章の展開をとらえ、適切な言葉でまとめることができる」ことをねらいとした問2は、筆者の挙げた二つの項目「調教師を喜ばせること」「その中で自分自身も生きること」のどちらも挙げなければならないところを、一項目のみ答えるという誤答が多かった。また、設問において、理由を問われている際には、文末表現を「～ので」や「～から」で結ぶ必要があるが、その点の不十分な解答が多かった。
- ・ 「文章の展開をとらえ、適切な言葉を抜き出すことができる」ことをねらいとした問3は、「知性」と「意志」のみを文章全体のキーワードとしてとらえているために、「強制」という解答に結び付けることができていなかった。「文章の展開に即して内容をとらえることができる」ことをねらいとした問4は、全国教育課程実施状況調査と同様に、内容を問題文全体の展開に即してとらえることが、十分にはできていなかった。

そこで、指導に当たっては、次のような手立てが考えられる。

段落ごとの内容をとらえるために「序論・本論・結論」という説明文の基礎的な構成を意識させ、段落相互の関係を正しく押さえる読解の基本的な技能を身に付けさせる。

文章の内容を把握し、目的や必要に応じて要約する指導を適宜行う。

具体的な例～筆者の考えが述べられている文か、具体例が書かれている文かに着目し、筆者の考えが述べられている文をまとめる。

文章のキーワードをとらえさせ、それがどのように使われているかに注意しながら読み取らせるように指導する。

具体的な例～題名に着目させるとともに、何度も繰り返して出てくる言葉に注意した読みを行う。

質問に応じた正しい文末表現を繰り返し練習させる。

具体的な例～「なぜか」という質問には、「～だから」と呼応させる。

四 正答率 (68.6%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	くらう	55.7	H15 58.7 類似	くうものです(21.4) 食うものです(16.8)
2	ア	69.5		エ(15.2) イ(8.4)
	エ	71.3		ア(18.1) ウ(8.0)
3	ア	78.0		イ(9.8) ウ(8.6)

< 考察 >

故事成語「虎の威をかる狐」を素材にした文章により、古典（漢文）に関する基礎的な力をみる問題である。

- ・ 「文語を現代仮名遣いに書き直すことができる」ことをねらいとした問1の正答率は、昨年度より3.0ポイントほど下がった。「現代仮名遣い」を問うているにもかかわらず、誤答はすべて、現代語訳しているものであった。これは、「現代ではどのように書き表すか」という設問の意味を「現代仮名遣いに書きかえる」こととして理解できなかった生徒が多かったためと考えられる。
- ・ 「文章の展開に即して、適切な言葉を抜き出すことができる」ことをねらいとした問2は、誤答例からみると、現代語訳と文語文を正確に対応させて読むことができなかったことや、現代語訳の内容の読み取りが不十分であったことが考えられる。
- ・ 「文章の展開をとらえて故事成語の意味を指摘することができる」ことをねらいとした問3は正答率が高かった。平成14年度の類似のもの比べて、21ポイント上昇している。

そこで、指導に当たっては、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い、古典に親しむ態度を育成するために、次のような手立てが考えられる。

目的意識を明確にした上で、音読や暗唱を継続的に行い、古文・漢文の読みに十分慣れ親しませる。

「歴史的仮名遣い」、特に単語の途中にくる「ハ」、「ワ行」や「古語の意味」(「いと」のように、現代では使われないもの、「ののしる」のように、現代と違う意味のもの。)など、古典を読む際の基礎となる力を確実に修得させる。

文語文と現代語訳を照らし合わせながら読み、動作の主体は誰かなど、要点を押さえながら、内容を的確にとらえさせる。

機会をとらえて、古典に触れさせる。

具体的な例～・「歌会始」などの行事にからめて百人一首に触れさせる。

- ・ 身近な故事成語への関心を高める。
- ・ 古典に関心をもたせるように書かれた現代の文章を紹介する。
- ・ 安井息軒，児玉久右衛門など，宮崎県に関連する人の書いた古典の文章を読ませる。

五 正答率 (67.8%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	誤答例(%)		
1	(1) 春ゆかんとす	40.8	我目(25.6)	今年ばかりの(10.4)	いちはつ の花(10.2)
	(2) 命	78.3	春(13.4)	生命(2.0)	
2	ア E	61.9	D(18.8)	F(13.6)	
	イ B	68.4	F(18.1)	E(6.3)	
	ウ C	89.6	B(5.4)	F(2.0)	D(1.3)

<考察>

韻文(短歌)やその鑑賞文についての読解力を問う問題である。

- ・ 「鑑賞文の内容に即して適切な言葉を抜き出すことができる」ことをねらいとした問1の(2)は適語補充の問題であるが、漢字一字で抜き出すという条件があるため、正答率が高かった。「短歌の内容をとらえて読むことができる」ことをねらいとした問2のウは、短歌の内容が分かりやすく、「子」という言葉が他の短歌では出てこないために選択しやすかったため、正答率が高かったと考えられる。
- ・ 問1の(1)は正答率が特に低かったが、歌中の「春ゆかんとす」に込められた作者の思いを読み取ることが難しかったためと思われる。また、鑑賞文中の「我目には今年ばかりの」「ほかの人の目には」「わたしの目には、今年限りで春は来ない」という表現にとらわれすぎて、「我目」という誤答が出てきたものと考えられる。
- ・ 問2のアでは、誤答としてDが多かった。これは説明の文にある「『の』の多様」だけに気をとられ、「植物の様子」であることを見落としたことが考えられる。また、イでは「色彩」という言葉から、色の名が出ている短歌を選んだ誤答も目立った。これらの誤答は、短歌を読んでその情景全体を想像する力が十分に身に付いていないために、短歌の一部や説明の一部だけを見て答えたからであると考えられる。
- ・ 全体として、提示された問題文や設問の文を注意深く読まないために、正解を答えられないという傾向がある。

そこで、指導に当たっては、作品に描かれた情景、心情などを表現に即して読む能力を育成するために、次のような点に留意する必要がある。

機会をとらえ、設問の文を正確に読むように指導する。特に、答え方の条件は何かなどを注意深く読むように、繰り返し指導する。

短歌に詠まれている言葉を手がかりに、情景を具体的に思い描かせたり、一語一語に込められた作者の思いを大切にしながら読み味わわせる学習活動を工夫する。

具体的な例～鑑賞文を書く。想像した情景を絵に描いてみる。

表現上の違いや特徴を考え、より深く味わい、目的と必要に応じて多様な読みができるような指導の工夫をする。そのためには、表現技法や短歌のきまりなどの知識を確実に習得させることが必要である。

具体的な例～同じ主題で詠まれたいろいろな短歌を読み比べる。

六 正答率 (54.8%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	動きだし	74.2	H15 38.9 類似	象のように(13.6) ゆっくりと(8.9) 驚いた(1.8)
2	イ	41.0	H15 71.5 類似	ク(23.5) ア(20.8) ウ(6.2)
3	四	46.7		五(28.9) 三(18.9)
	一	27.9		二(39.6) 三(30.6)
4	ござとへん	49.9		おおざと(20.8) ござと(4.2) 無解答(23.9)
	りっとう	71.5		りっしんべん(14.3) おおざと(1.8) 無解答(10.2)
5	おさ	96.0	全国 91.7 同一	もと(2.2)
	おんけい	46.1		おんえ(16.8) おんい(12.3) おんし(12.2) おんみ(8.6)
	かえり	47.5		こころ(26.8) あわれ(8.6) かいま(8.1)
6	備	60.0		備(20.9) 供(14.8)
	保障	25.4		保証(58.9) 保償(3.2) 保生(3.0)
	雑誌	71.2		雑紙(23.1) 雑誌(3.2)

< 考察 >

言語事項に関する問題である。

- ・ 「主語・述語の関係を理解し、指摘できる」ことをねらいとした問1は、昨年度と比べて述語の位置が近かったため、正答率が大幅に上昇したと考えられる。「品詞の区別が的確にできる」ことをねらいとした問2は、正答率が平成15年度と比較して大幅に下がっている。この原因としては、第1に、「楽しい」という終止形ではなく、「楽しく」と出題されており、形容詞の活用の形を正確に把握していなかったため、第2に、「楽しく」の基本形が「楽しい」と活用させて考えることができない生徒が多いため、第3に、「楽しい」という言葉を単純に感動の気持ちと結び付け、「感動詞」であると誤答したためであると考えられる。
- ・ 「正しい筆順で書くことができる」ことをねらいとした問3の は、平成14年度と比べて、6.7ポイント、「漢字の部首を指摘できる」ことをねらいとした4の は7.5ポイント上昇している。また、「これまでに習った漢字を読むことができる」ことをねらいとした6の は、全国教育課程実施状況調査と比べて、4.3ポイント高い。各学校での取組の成果が少しずつ現れてきていると考えられる。しかし、3の は見慣れているはずの漢字であるにもかかわらず、正答率が低かった。さらに、正しい筆順への意識を高める必要がある。

そこで、指導に当たっては、次のような指導の手立てが考えられる。

授業の中に小テストを位置付け、さらに、筆順や部首名、文法、同音異義語等を練習するプリントを作成して、定期的に与える。その際に、小テストの予習、復習の手立てを示すことが大切である。

「生活の記録」の活用など、ふだんから表現活動の中に漢字を用いて書く態度を育成することと、読む本のジャンルを広げたり、新聞を読む習慣づくりに努めたりする。

新聞のコラムなどを視写させることによって語彙力を増やし、それぞれの言葉がもつ意味を的確にとらえさせる。



## 中学校第2学年

### (2) 社会

#### 分析結果の表記について

「小問ごとのねらいと正答率」の評価の欄の については、県正答率と予想正答率との差を記号化して示している。

- 1 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上高いもの.....
- 2 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上低いもの.....
- 3 1と2の間にあるもの .....

「小問ごとのねらいと正答率」の比較の欄の「H15」「全国」については、過去の基礎学力調査問題や全国教育課程実施状況調査問題と同一問題、類似問題であることを示している。

- 1 H15 ~ 平成15年度基礎学力調査問題と同一または類似問題
- 2 全国 ~ 平成13年度全国教育課程実施状況調査問題と同一または類似問題  
正答率と誤答率は、抽出調査した全人数に対する割合を表している。

誤答例については、抽出調査した中で、割合の高かったものを中心に記載している。





## (2) 社会

調査問題の構成とねらい

- ・ 社会科の理解力・思考力・判断力に関する基礎的・基本的な知識や能力をみる問題とした。
- ・ 写真や地図、グラフ、図などの、様々な資料活用能力をみたり、記述式の問題を取り入れたりして、生徒の多様な考え方や態度、表現力をみる問題とした。
- ・ 日常生活にみられる身近な題材を取り上げ、社会科に関する興味・関心がもてる問題とした。

平均点 60.0点

小問ごとのねらいと正答率

大問	分野	小問	内容・ねらい	観点	大問別 正答率	小問別 正答率	予想 正答率	評価	比較
1	世界の 地域	問1	ユーラシア大陸を知っている。	知識	61.5	81.9	75		
		問2	各大陸のおおよその形状を資料から判断できる。	資料		53.5	80		
		問3	日本と同緯度にある国を地図上で判断できる。	資料		54.5	60		
		問4	目的別の地図の特徴を理解している。	知識		69.7	80		
		問5	時差の計算ができる。	知識		48.1	50		H15
2	日本の 地域	問1	領土、領海、領空を理解している。	知識	67.3	39.1	55		
		問2	日本との関連でオーストラリアの特徴を知っている。	知識		79.1	70		
		問3	日本の周辺部の国と海洋を知っている。	知識		70.4	70		
		問4	日本の7地方区分を知っている。	知識		65.6	75		
		問5	日本の各地方の気候を大観することができる。	資料		82.5	80		H15
3	身近な 地域	問1	地形図の読み取りができる。	資料	68.0	40.3	60		
		問2	地形図の2地点間の距離を計算できる。	知識		44.7	60		H15
		問3	地形図の地図記号から調査テーマを考えることができる。	思考		93.7	70		
		問4	調査活動の留意点を考えることができる。	思考		93.4	65		
4	都道府 県	問1	資料からピーマンの生産の特徴を読み取ることができる。	思考	58.0	53.0	60		全国
		問2	資料から適切な表現方法を判断できる。	思考		57.2	60		全国
		問3	宮崎県のピーマン栽培の特徴を理解している。	知識		63.7	60		H15
5	古代の 日本	問1	打製石器の特徴を知っている。	知識	75.1	74.2	65		
		問2	写真から縄文土器が分かる。	資料		74.2	70		
		問3	中国の歴史書に記された日本の様子を理解している。	知識		60.0	70		
		問4	弥生時代に稲作が普及したことを知っている。	知識		58.4	70		
		問5	渡来人を知っている。	知識		89.2	65		
		問6	前方後円墳の形状をえがくことができる。	資料		94.6	85		
6	中世の 日本	問1	日本で最初の律令の内容を判断できる。	思考	59.3	51.1	60		
		問2	平城京を知っている。	知識		48.8	70		
		問3	かな文字を知っている。	知識		72.2	65		
		問4	鎌倉幕府の地図上の位置を知っている。	知識		63.5	70		
		問5	古代から中世までの時代を概観できる。	資料		61.0	70		
7	近世の 日本	問1	豊臣秀吉の功績を知っている。	知識	56.2	58.3	60		
		問2	武家諸法度を資料から判断できる。	資料		60.2	70		
		問3	キリスト教弾圧が資料から読み取ることができる。	資料		70.7	60		
		問4	元禄文化の特徴を理解している。	知識		35.6	50		H15
		問5	徳川吉宗の享保の改革を知っている	知識		56.1	50		
8	近代の 日本	問1	日米和親条約を資料から判断できる。	資料	71.9	74.6	65		
		問2	アメリカの南北戦争を知っている。	知識		65.6	60		
		問3	地租改正を理解している。	知識		71.9	60		全国
		問4	伊藤博文の功績を知っている。	知識		74.8	65		
		問5	産業革命を知っている。	知識		72.4	70		

思考(思考・判断), 資料(資料活用の技能・表現), 知識(知識・理解)

**1** 正答率 ( 61.5% )

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ユーラシア大陸	81.9		ヨーロッパ(3.0) アジア(2.2)
2	エ	53.5		イ(16.8) ア(7.2)
3	イ	54.5		ア(12.6) ウ(4.4)
4	エ	69.7		ア(9.6) ウ(8.0)
5	8時間	48.1	H15 43.0 類似	9時間(16.4) 無解答(7.8)

< 考察 >

世界の地域構成に関して、地図を通して地球上の位置関係や、世界の国々の構成と地域区分について問う問題である。

問2は、地図上で、アフリカ大陸の形状を判断する基礎的・基本的な内容であり、問3は、地図を活用して日本と同緯度の国を選択するものであるが、いずれも正答率が低い。問5は、昨年度との類似問題である。正答率は伸びているが、昨年度と同様に40%台の低い正答率である。緯度や経度、時差に関する基礎的・基本的な内容が十分に身に付いていないことが分かる。

そこで、指導に当たっては、大陸のおおまかな地図をかかせたり、教科書にある緯度や経度の問題を利用したりするなど、繰り返し指導する必要がある。また、地図や地球儀を活用した学習を進めることで、地図の読み取りに慣れさせるとともに、時事的な内容とも関連させて地図を用い、生徒の興味・関心を高める工夫を授業の中で行うことが大切である。

**2** 正答率 ( 67.3% )

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ウ	39.1		エ(27.4)
2	オーストラリア	79.1		中国(1.6) ロシア(1.6) 無解答(1.8)
3	エ	70.4		ウ(16.0) イ(5.0)
4	イ	65.6		ア(12.6) エ(6.0)
5	ア	82.5	H15 92.3 類似	イ(5.0) エ(3.8)

< 考察 >

日本の地域構成に関して、日本の位置や領域及び都道府県の構成・地域区分について問う問題である。

問1は、国土の領域の特色を広い視野から判断する問題である。正答率が低く、「領海を200海里」とする選択肢エの誤答が、27.4%と高い。領土・領海、経済水域などに関する基礎的・基本的な知識が不十分であることが分かる。問5は、昨年度との比較問題である。正答率は82.5%と高いが、那覇市の気候グラフを選択させた昨年度の92.3%と比較すると、正答率は下がっている。寒冷地である札幌市の気候の特色に関する理解が、やや不足していたことが原因と思われる。

そこで、指導に当たっては、我が国の位置と領域の特色を、地球儀や地図を活用して多面的・多角的にとらえさせ、地図帳を使って説明させたり、模式図をかかせたりする必要がある。また、我が国と近隣の国々との領域をめぐる具体的な問題点にもふれるなどして、日本の地域構成に関して興味・関心を高めることが大切である。

**3** 正答率 ( 68.0% )

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ウ	40.3		エ ( 21.4 ) イ ( 14.0 )
2	5 0 0 m	44.7	H15 45.0 類似	50000m ( 6.0 ) 5000m ( 3.4 ) 無解答 ( 5.2 )
3	イ	93.7		
4	A	94.8	93.4	
	B	92.0		

< 考察 >

身近な地域について観察や調査などを行う学習活動において、その地域的特色をとらえるための地形図の読み取り、調査活動の手順や視点、方法について問う問題である。

問1と問2は、昨年度と同様に40%台の低い正答率である。地形図における地図記号及び方位、土地利用などの知識・理解と、それらを基に地形図を読み取る力や、縮尺に関する理解が不十分である。調査活動の手順や視点、方法について出題した問3と問4は、正答率が高く、調査活動に関する理解が十分に定着していることが分かる。

そこで、指導に当たっては、地形図の読み取りにおいて、実際の地域調査によって、地形図も活用しながら確認させた上で、地形図から関心のある地理的事象を発見させたり、地域的特色をとらえさせたりするなどの活用の技能を高める指導を取り入れることが大切である。また、身近な地域の調査活動を行う際に、地形図の他に、その他の統計資料にも多くふれさせることが大切である。

**4** 正答率 ( 58.0% )

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	エ	53.0	全国 48.6 同一	ウ ( 13.8 ) ア ( 7.8 )
2	グラフ	63.1	全国 48.5 同一	ア ( 18.0 ) イ ( 3.4 )
	理由	51.3		ア ( 14.6 ) ウ ( 8.2 )
3	冬の温暖な気候、ビニールハウスで栽培	63.7	H15 67.8 類似	気候のみの記述 ( 7.0 ) 無解答 ( 9.0 )

< 考察 >

農産物の生産について、統計資料や主題図から都道府県規模の地域的特色を判断する力や、統計資料を適切なグラフに表す力が身に付いているかをみる問題である。

問1と問2は、平成13年度教育課程実施状況調査との比較問題である。全国の前正答率は、問1が48.6%、問2が48.5%であり、いずれも本県の正答率が上回る結果であった。様々なグラフを読み取ったり、統計資料をグラフに表したりする学習指導の充実が図られていることが分かる。問3は、昨年度との比較問題である。本県特産の農産物名を答えさせた昨年度に対して、生産量が多い理由を説明させる問題に変更したことによって、正答率が下がったものと思われる。

そこで、指導に当たっては、地図の読み取りや作図、グラフなどの統計資料の読み取りや主題図の作成などの作業的な学習を取り入れ、それらを発表する機会を設けていくことが大切である。

**5** 正答率 (75.1%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	誤答例(%)
1	打製石器	74.2	石器(2.4) 磨製石器(1.8) 無解答(4.8)
2	イ	74.2	ウ(8.4) ア(4.8)
3	イ	60.0	ア(15.8) 工(5.2)
4	稲作	58.4	土器(2.8) 無解答(8.6)
5	渡来人	89.2	
6	省略	94.6	

<考察>

古代における人々の生活の変化を、土器の使用や稲作・金属器の伝来など、大陸との関係から問う問題である。

問4は、無解答や同単元の関連事項に関する他の語句を答えている誤答がみられる。大陸から伝来した稲作によって、大きく変化した時期の日本社会についての理解が不十分であることが分かる。問5は、語句を記述する問題の中では最も正答率が高く、基礎的・基本的な内容の定着のための指導が確実に行なわれていることが分かる。問6は、前方後円墳の形状をえがく問題であり、高い正答率となった。生徒の考古学への興味・関心の高さがうかがえる。

そこで、指導に当たっては、博物館や郷土資料館の利用、各種の資料を適宜活用するとともに、中国などの世界の古代文明との関連を重視したり、新たに発掘された遺跡や遺物などの考古学上の成果を取り入れたりして、歴史学習における最初の単元の学習に当たって、生徒の興味・関心を高める工夫が必要である。また、古代における人々の生活の変化や特色をまとめた一覧表を生徒に作成させるなどの作業的な学習を取り入れることも大切である。

**6** 正答率 (59.3%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	誤答例(%)
1	ア	51.1	イ(26.8) ウ(7.6)
2	平城京	48.8	平安京(24.6) 無解答(7.4)
3	かな文字	72.2	甲骨文字(3.6) 無解答(7.8)
4	イ	63.5	ウ(20.8)
5	工	61.0	ウ(15.4) イ(6.8)

<考察>

古代から中世までの国家が形成されていく過程のあらまし、大陸から取り入れた文物や制度、日本独自の文化について問う問題である。

問1は、我が国が最初に取り入れた大陸の制度に関する問題で、正答率は低い。問2は、国際的な要素をもった文化が、都を中心に栄えた歴史的な事象についての基礎的・基本的な問題である。正答率が48.8%と低く、奈良の都を「平安京」とする誤答が24.6%もあったことから、基礎的・基本的な内容の定着が不十分であることがわかる。問4は、鎌倉幕府の地図上の位置を問う問題である。また、問5は、元寇の時期を判断するもので、いずれも歴史的分野の基礎的・基本的な内容であるにもかかわらず、その定着は、正答率から判断すると十分とは言えない。

そこで、指導に当たっては、各時代の特色をとらえさせる際に、その時代の個別の事象だけを取り上げて指導するのではなく、前後の時代と比較させるなどして、歴史の流れを大きくつかませることが大切である。また、歴史的分野の授業において、随時、地図の活用を図り、地理的分野と関連付ける指導の工夫も大切である。

**7** 正答率 ( 56.2% )

問題番号	標準解答	正答率( % )	比較( % )	誤答例( % )
1	豊臣秀吉	58.3		徳川家康( 10.2) 織田信長( 8.2)
2	工	60.2		ア( 14.0) ウ( 4.2)
3	キリスト教の信者を見つけ出すため	70.7		無解答( 12.4)
4	イ	35.6	H15 33.6 類似	ア( 16.2) ウ( 14.8)
5	享保の改革	56.1		天保の改革( 5.6) 寛政の改革( 4.4) 無解答( 15.6)

< 考察 >

近世社会の成立とその変化を、代表的な歴史上の人物及び制度、文化などを中心にとらえさせ、近世社会の全般について問う問題である。

問1は、重要な人物であるが、正答率は低い。問3の正答率は高いが、無解答も多く、資料から読み取れることを適切に表現する力が不足している。問4では、元禄文化と化政文化を混同していると思われる、昨年度と同様、正答率が低い結果となった。それぞれの文化の特色の理解が不十分であることが分かる。特定の時代の学習内容を、他の時代のものや類似している内容と混同している箇所があると思われる。

そこで、指導に当たっては、小学校の歴史学習との関連を重視し、各人物に関する内容をまとめさせ、発表の機会を設けることが大切である。また、歴史的事象に、年号が使われている例を確認させるとともに、それぞれの時代の政治や文化を代表する写真や絵、文章などの歴史資料を活用し、多面的・多角的に考えさせる場を設ける必要がある。

**8** 正答率 ( 71.9% )

問題番号	標準解答	正答率( % )	比較( % )	誤答例( % )
1	日米和親条約	74.6		日米修好通商条約( 9.0) 無解答( 5.2)
2	ウ	65.6		ア( 14.0) イ( 3.6)
3	工	71.9	全国 60.1 類似	ア( 7.0) ウ( 7.0)
4	伊藤博文	74.8		板垣退助( 1.6) 無解答( 9.6)
5	産業革命	72.4		産業改革( 5.8) 無解答( 14.2)

< 考察 >

日本が立憲国家として近代化を進めていく過程を、年表などでとらえさせ、世界の動きと関連付けて問う問題である。

問3は、平成13年度中学校教育課程実施状況調査との比較問題である。全国の正答率よりも高く、重要事項の定着が図られている。問4と問5も、正答率は高いが、無解答や似た記述による誤答が目立つことから、基礎的・基本的な事項の正確な知識・理解が十分ではないことが分かる。

そこで、指導に当たっては、幕末から明治時代にかけてのできごとを年表にまとめる作業をさせたり、人物ごとに関連事項を整理させたりすることが必要である。その中で、小テストなども取り入れながら、定着を図ることが大切である。重要語句や人物名を漢字で正確に書かせる指導も繰り返し行うことが大切である。



## 中学校第2学年

### ( 3 ) 数学

#### 分析結果の表記について

「小問ごとのねらいと正答率」の評価の欄の については、県正答率と予想正答率との差を記号化して示している。

- 1 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上高いもの.....
- 2 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上低いもの.....
- 3 1と2の間にあるもの .....

「小問ごとのねらいと正答率」の比較の欄の「H15」「全国」については、過去の基礎学力調査問題や全国教育課程実施状況調査問題と同一問題、類似問題であることを示している。

- 1 H15 ~ 平成15年度基礎学力調査問題と同一または類似問題
- 2 全国 ~ 平成13年度全国教育課程実施状況調査問題と同一または類似問題  
正答率と誤答率は、抽出調査した全人数に対する割合を表している。

誤答例については、抽出調査した中で、割合の高かったものを中心に記載している。





## (3) 数 学

調査問題の構成とねらい

- ・ 3つの領域(数と式, 図形, 数量関係)についての基礎的・基本的な内容を出題した。
- ・ 学習指導要領を踏まえながら, 教科書の内容の定着度をみる問題とした。
- ・ 単なる知識を問うことに偏らないように, 論理的思考力をみる問題とした。
- ・ 与えられた条件から必要な情報を正確によみとり, 的確に問題解決が図れるかをみる問題とした。

平均点 61.2点

小問ごとのねらいと正答率

大問	小問	領域	観点	内容・ねらい	大問別 正答率	小問別 正答率	予想 正答率	評価	比較
1	(1)	A	知	2つの整数の加法の計算を理解している。	77.2	97.5	98		H15
	(2)	A	知	絶対値の意味を理解している。		54.8	50		H15
	(3)	A	表	分数を含んだ除法の計算ができる。		84.7	85		H15
	(4)	A	表	正の数・負の数の乗法や累乗の計算ができる。		71.6	80		H15
	(5)	A	表	正の整数・負の整数の加減乗除の計算ができる。		80.6	60		H15
	(6)	A	表	文字式の同類項をまとめて, 簡単にすることができる。		78.4	75		H15, 全国
	(7)	A	表	文字式の除法の計算ができる。		72.7	75		H15
2	(1)	A	表	分数で表された式の値を求めることができる。	79.0	82.0	75		H15
	(2)	A	表	一次方程式を解くことができる。		91.7	85		H15
	(3)	A	知	偶数を文字を用いて式に表すことができる。		79.4	80		全国
	(4)	A	表	式を変形させることができる。		63.8	65		H15
	(5)	A	表	連立方程式を解くことができる。		77.9	70		H15, 全国
3	(1)	A	表	数量を文字式で表すことができる。	71.0	71.7	80		
	(2)	A	表	一次方程式を立式できる。		69.0	80		H15
	(3)	A	表	一次方程式を解いて答え(人数)を求めることができる。		73.9	75		H15
		A	表	一次方程式を解いて答え(枚数)を求めることができる。		69.2	75		H15
4	(1)	A	表	連立方程式を立式できる。	61.1	65.3	75		
	(2)	A	表	連立方程式を解いて答えを求めることができる。		56.9	70		H15
5	(1)ア	C	考	数量を文字式で表すことができる。	58.9	54.1	55		H15
	(1)イ	C	表	変域の意味を理解し, 不等式を使って表すことができる。		35.1	50		H15
	(1)ウ	C	表	変域に制限のある比例の式を, グラフに表すことができる。		50.4	50		
	(2)	C	表	比例の意味を理解し, 表をよみとることができる。		87.8	65		
C		表	反比例の意味を理解し, 表をよみとることができる。	67.2	65				
6	(1)	C	表	傾きと通る点から, 直線の式を求めることができる。	54.8	59.2	65		H15
	(2)	C	知	変化の割合の意味を理解している。		34.7	50		
	(3)ア	C	表	グラフから直線の式を求めることができる。		75.0	60		全国
	(3)イ	C	考	2つの1次関数のグラフの交点を求めることができる。		50.2	50		H15
7	(1)	B	表	垂線の作図をすることができる。	45.4	54.7	55		H15
	(2)	B	考	おうぎ形の中心角を求めることができる。		41.9	50		
	(3)ア	B	知	円柱の体積の求め方を理解している。		35.6	75		全国
	(3)イ	B	知	円柱の側面の展開図を理解している。		63.6	80		
	(3)ウ	B	考	円柱の側面積を求めることができる。		31.0	70		全国

領域は, A...数と式 B...図形 C...数量関係

観点は, 考...「見方・考え方」, 表...「表現・処理」, 知...「知識・理解」を示している。

1 正答率(77.2%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
(1)	3	97.5	H15 97.5 類似	- 3 (1.4) 無解答 (0.2)
(2)	-1,0,1	54.8	H15 42.4 類似	1, 0, - 1, - 2, - 3 (7.8) - 1, 1 (4.2) 無解答 (1.0)
(3)	- 1 6	84.7	H15 80.3 類似	- 4 (1.6) 1 6 (0.6) 無解答 (1.0)
(4)	4 5	71.6	H15 61.1 類似	- 4 5 (13.2) 3 0 (1.8) 無解答 (0.2)
(5)	1 1	80.6	H15 79.4 類似	- 5 (3.2) - 4 (3.0) 無解答 (0.4)
(6)	$x - 5 y$	78.4	全国77.5 同一 H15 79.4 類似	$x - 7 y$ (3.2) $x + 5 y$ (1.4) 無解答 (1.4)
(7)	- 2 a	72.7	H15 68.2 類似	2 a (4.8) - 3 a (1.2) 無解答 (2.6)

< 考察 >

基本的な計算問題である。(2)は絶対値の意味を理解しているかをみる問題である。それ以外は計算法則や計算方法が理解され、定着しているかをみる問題である。

(2)の誤答例をみると、絶対値が原点からの距離を表す値であることへの理解が不十分であり、負の数の領域にそれを当てはめることができずに単に「1.5より小さい整数」ととらえていることが分かる。それでも、昨年度より正答率が若干高くなっており、昨年度の基礎学力調査の結果をふまえて指導に力を入れた結果であると考えられる。また、昨年度の1.8と比べて1.5という数の数直線上の位置が、若干とらえやすかったのではないかと考えられる。(4)は $-3^2$ と $(-3)^2$ の違いを理解していないことが分かる。(3)、(5)～(7)については四則を含んだ式の計算方法や符号の処理の仕方、括弧のはずし方の定着が不十分であることが誤答例からわかる。(6)については全国教育課程実施状況調査との同一問題であるが、正答率は全国(77.5%)とあまり差がない。

そこで、指導に当たっては、絶対値の意味が0からの距離であることを、数直線を利用して指導する事が大切である。指数の計算や四則を含んだ計算では、まず計算順序を理解させ、練習問題を多く取り入れながら、繰り返して演習に取り組みさせることが必要である。計算は、数学の全般にわたって必要なものであり、数学の苦手な生徒たちがつまづきやすいところでもある。計算のルールへの定着を図ることが、その解決の第一歩であると考えられることから、繰り返して練習させるとともに、常に生徒の定着度を机間指導や小テストを利用して確認しながら指導に当たる必要がある。

2 正答率(79.0%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
(1)	2	82.0	H15 70.5 類似	1 8 (0.6) 3 (0.6) 無解答(3.6)
(2)	$x = 4$	91.7	H15 86.0 類似	3 (0.4) 1 0 (0.4) 無解答(1.2)
(3)		79.4	全国77.3 同一	(5.2) (4.8) 無解答(0.6)
(4)	$b = \frac{5 - 3a}{2}$	63.8	H15 64.7 類似	$b = -3a + \frac{5}{2}$ (4.2) $b = 1$ (1.8) 無解答(7.4)
(5)	$(x, y) = (2, -1)$	77.9	全国75.1 同一 H15 70.5 類似	$(x, y) = (-1, 1)$ (2.6) $(x, y) = (2, 1)$ (1.6) 無解答(2.2)

< 考察 >

第2学年までに学習した文字の式や方程式に関する基本的な内容の定着を見る問題である。

(1)は、昨年度(70.5%)より11.5ポイントの上昇、(2)も昨年度(86.0%)より5.7ポイント上昇で、ある程度定着しているといえる。(3)は、ある程度定着しており、全国(77.3%)との比較をしてもほぼ同じ正答率である。誤答を見ると、の解答が多い。これは、偶数は2の倍数であることは理解しているものの『 $2 \times$ (自然数)』と立式ができないためと思われる。(4)は、昨年度とほぼ同じ正答率である。式変形が適切に行われなかった誤答や文字の項と数の項をまとめた誤答が多く、『 $b$ について解く』という意味を十分理解していないことが分かる。また、無解答率も比較的高く、等式を目的に応じて変形することを、十分身に付けるためには更なる指導の工夫が必要である。(5)は、ある程度定着しており、全国(75.1%)との比較をしてもほぼ同じ正答率である。

そこで、指導に当たっては、新しく学習する内容と既習事項の系統性を指導者が十分に把握した上で、適切な手立てを講じることが必要である。特に、(4)は、ただ操作だけを覚えさせるのではなく、「一次方程式」で学習した移項などの式変形を、授業の導入で十分振り返るという手立てが有効である。このことで、生徒は今まで学習したことを活用すれば解けるという安心感と自信をもって問題に取り組むことができるとともに、既習事項の大切さを改めて感じさせることができると思われる。また、計算ミスと思われる誤答も多くみられた。基本的な内容を定着させるために、既習事項に常に触れさせる機会をつくることも必要である。授業での演習の充実はもちろんであるが、単元終了後も、既習事項を振り返る小テストを定期的の実施したり、ドリルを中心とした家庭学習を行わせたりすることによって、基本的な内容の定着を図る必要がある。その際、ただ、答えを出して終わるのでなく、必ず途中の計算を書かせることや答えの見直しを行う習慣を身に付けさせることなど、きめ細かに指導していくことが望ましい。

3 正答率(70.8%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
(1)	$8x + 7$	71.7		$8x - 7$ (2.8) $x + 7$ (0.4) 無解答(6.4)
(2)	$8x + 7 = 10x - 9$	69.0	H15 90.9 類似	$y = 8x + 7, y = 10x - 9$ (2.4) $8x - 7 = 10x + 9$ (1.0) 無解答 (10.0)
(3)	生徒数8人 カード数71枚	(73.9) (69.2)	H15 86.9 類似	9人(1.0) 13人(0.4) 無解答(11.0) 9枚(0.6) 79枚(0.6) 無解答(12.0)

< 考察 >

方程式の利用に関する問題であり，数量関係の過不足に目をつけ，1つの数量を2通りの方法で表し，それを立式して解を求める力をみる問題である。

(1)では，数量を文字式で表す力が不十分であることが分かる。(2)では，(1)が理解できていないことから誤答が多くみられたが，中には(1)ができていなくても，立式することができるものがみられた。また，一次関数を学習した直後であることから，一次方程式と一次関数を取り違えているものもみられた。(3)では，(2)より正答率が高く，方程式を立式せずに答を導いたと思われるものがみられた。また，方程式を解くことで，生徒数を求めることはできるが，その後，カードの枚数をどのようにして，求めるのかを理解していないものもみられた。昨年度の類似問題と比較すると，与えられた一次方程式を解く大問2の(2)では，昨年度より正答率が高いものの，一次方程式の利用の問題では，約22ポイントも正答率が下がっている。これは，文章の意味が理解できない生徒が多かったのではないかと考えられる。

そこで，指導に当たっては，問題の文中にある数や文字が何を表しているかを十分読みとって，問題解決に当たる習慣を身に付けさせる必要がある。式を作るときに，数量の間の関係を十分に把握し，等式の間を関係を考えながら立式していくことが大切である。等式の間を関係を見つけるための方法として，図や表などを使って，何が等しいのかを考えることを習慣化させることも必要である。そのことが方程式を作る技能を高めさせることにもなる。

4 正答率(61.1%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
(1)	$\begin{cases} x + y = 55 \\ x = 3y - 5 \end{cases}$	65.3		$x + 3y = -5$ (0.6) $y = 3x - 5$ (0.4) 無解答(20.8)
(2)	大きい方の数 40 小さい方の数 15	56.9	H15 83.6 類似	$85$ (1.4) $30$ (1.4) $-30$ (1.2) $25$ (1.0)    無解答(23.8)

<考察>

連立方程式の利用の問題であり、文章に表された2つの数の数量関係から連立方程式を立式し、それを解いて問題を解決できるかどうかをみる問題である。

連立方程式の立式については、問題文から2つの数量関係をよみとることができず、無解答が非常に多かった。また、 $5x - 3y = 55$ などの1つの方程式で表そうとしたり、問題に出てきた「3, 5, 55」の数字をただ並べているだけではないかと思われる誤答もみられ、問題から数量関係をよみとり、連立方程式に表す力が十分身に付いていないと考えられる。また、連立方程式を解くことについては、代入法による解法が十分身に付いていないと考えられる。(2)では、55以上の整数や負の数を解として答えている誤答も多く、解が問題にあっているかを吟味する習慣が十分身に付いていないと思われる。また、お金などの具体物については問題をとらえやすいようであるが、数などの抽象的なものに対しては十分に理解していないと考えられる。

そこで、指導に当たっては、教科書にある例題の解法をパターン化して覚えさせるのではなく、数量関係をしっかり把握させながら、方程式を立式させるように指導する必要がある。そのためには、数量関係が分かるように問題文に線を引かせたり、数直線、図、表を活用することが大切である。そして、問題を正確によみとり、さらに、問題を解き終えた後に、答えが問題にあっているかどうか常に確認させる習慣を身に付けさせることも大切である。また、文章から数量の関係をよみとったり、それを文字式に表したりする力が十分ではないので、第1学年の文字の単元だけではなく、日々の授業において、数量や関係を、文字式で表す活動を重視し、繰り返し指導していくことが大切である。

5 正答率(58.9%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)	
(1)	ア	$y = 5x$	54.1	H15 51.0 類似	$y = 20 - 5x$ (1.4) $y = 5x + 20$ (1.4) 無解答 (8.4)
	イ	$0 < x < 4$	35.1	H15 37.7 類似	$0 < x < 20$ (8.8) $0 < x < 5$ (2.8) $5 < x < 20$ (3.0) 無解答 (13.0)
	ウ	省略	50.4		破線部分を実線でかいている (5.4) 実線と破線の区別がわからない (3.4) 傾きの間違い (2.6) 無解答 (11.0)
(2)	比例		87.8		(4.6) (2.4) 無解答 (1.6)
	反比例		67.2		(11.0) (7.8) 無解答 (2.4)

考察

「比例と反比例」に関する問題である。(1)アは具体的な事象の中にある2つの数量の関係を式に表す問題である。イは問題の条件に合うように不等号を使って変域を表すことができるかをみる問題である。さらに、ウは変域がある2つの数量の関係をグラフに表す問題である。(2)は表から2つの数量関係がどのような関係であるかをよみとる問題である。

(1)アについては、比例が一次関数の特別の場合であることを充分理解していないことや、一次関数を学習してそれほど時間がたっていないことから、数量関係を一次関数の  $y = ax + b$  の形に何とか表そうとしたことが、誤答例からよく分かる。また、距離と時間と速さの関係についての定着も不十分である。(1)イについては、 $y$  の変域をそのまま  $x$  の変域としている誤答例が多く、2つの文字がそれぞれ何を表しているのかを、十分理解しないまま答えていると判断できる。(1)ウについては(1)アの誤答のままグラフをかいている場合がほとんどである。また、変域を意識せずにグラフをかき、実線と点線の区別がつかない誤答例も目立った。更に、変域の意味やそれを不等号を使って表すことが不十分なまま、4時間で20km進むということから、グラフをかいた場合もあると考えられる。(2)については比例が、反比例が の誤答が多く、 $y$  の値の増加と減少をみて増加すれば比例で、減少すれば反比例と答えたと考えられる。

そこで、指導に当たっては、単に数量関係を式で表すことだけでなく、グラフや表を利用しながら、身のまわりの具体的な事象について考察させることで、関数関係の理解を深める必要がある。また、比例、反比例、一次関数を比較させることで、それぞれの関数関係の特徴を整理しながら理解させる必要がある。また、その際変数には制限があることを意識させることで、変域を意識しながら考察できるように指導する必要がある。

6 正答率(54.8%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
(1)	$y = 3x + 10$	59.2	H15 61.8 類似	$y = 3x - 2$ (1.4) $y = 3x - 10$ (1.4) 無解答(7.0)
(2)	$-\frac{1}{3}$	34.7		$-1$ (5.0) $1$ (3.2) 無解答(15.0)
(3)	ア $y = \frac{1}{2}x - 1$	75.0	全国58.8 同一	$y = 2x - 1$ (3.8) 無解答(2.8)
	イ $(-2, -2)$	50.2	H15 58.1 類似	$(2, -2)$ (2.2) $(2, -1)$ (1.4) 無解答(12.4)

<考察>

一次関数の基本的な内容の理解と、それを活用できるかどうかをみる問題である。

(1)は、昨年度(61.2%)とほぼ同じ正答率であるが、切片  $b$  を求めるときの計算ミスによる誤答が多い。(2)は、 $y$  の増加量を求めていた誤答が非常に多い。また、無解答が非常に多く、変化の割合の意味を十分理解しているとは言えない。(3)のアは、全国(58.8%)と比較しても16.2ポイント高いが、誤答例をみると傾きのよみとりが不十分である生徒もいる。(3)のイは、連立方程式を解く際の計算ミスによる誤答が多い。また、無解答も非常に多く、『一次関数のグラフの交点の座標と連立方程式の解は等しい』という考え方や、それを使って交点の座標を求める力が定着しているとは言えない。

そこで、指導に当たっては、単元の始めの段階で、基本的な内容の定着に向けて、徹底した指導を行う必要がある。例えば、「傾き」、「切片」、「変化の割合」等の重要語句の定着を図るために、カードなどを作成し、授業の導入での振り返りを継続的に行うことが、有効な手立ての一つと考えられる。「変化の割合」が、一次関数の場合は直線の「傾き」に等しいことは、グラフで十分理解させたあと、プリント等による演習を繰り返し行って、定着を図ることが望ましい。また、関数の領域については、式を求めたり、グラフをかかせるだけの指導で終わるのでなく、式・グラフ・表の関連にも注目させ、関数のよさを感じとらせることも重要である。このような指導を通して、一次関数を学習しようとする意欲を高める必要がある。そして、基本的な内容を十分定着させれば、(3)のイのような一次関数の考え方を利用する問題にも、意欲的に取り組むことができるようになると思われる。

7 正答率(45.4%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
(1)	直線外の点からの垂線の作図	54.7	H15 58.9 類似	角の二等分線(2.4) Aの二等分線(2.0) 無解答(9.8)
(2)	240度	41.9		120度(2.2) 235度(1.6) 無解答(18.6)
(3)	ア	144	全国51.3 類似	144(7.2) 72(1.6) のない誤答(19.8) 無解答(13.0)
	イ	長方形	63.6	展開図をかいている(4.2) 長方形と2つの円をかいている(1.4) 無解答(11.6)
	ウ	72	全国40.4 類似	72(4.6) 36(2.6) 104(2.6) のない誤答(14.6) 無解答(16.2)

<考察>

(1)は、基本的な垂線の作図についての技能をみる問題であり、(2)はおうぎ形についての中心角と弧の長さの関係をみる問題である。(3)は、円柱の体積や側面積を求めるなど、立体についての基本的な内容の理解をみる問題である。

(1)は、頂点B、Cから適当な点を取って作図しているものや、Aの二等分線の作図を行っている誤答がみられた。昨年度の類似問題と比較すると、正答率が約4ポイント低くなっている。これは、昨年度は線分だけを与えられ、それに垂線を引く問題であったが、今年度は、三角形の1つの頂点から対辺に垂線を引く問題であったために、角の二等分線等と間違えたと考えられる。(2)は、おうぎ形の弧の長さを求める公式、面積を求める公式を正確に覚えていない誤答や、公式を覚えていても等式の変形ができていないと思われる誤答がみられた。(3)では、体積を求める公式を正確に覚えていない誤答や、の未記入の誤答が多く、円柱の体積を求める力が十分に身に付いていないと言える。また、側面や側面積といった言葉も十分理解しているとは言えない。更に、「どんな図形になりますか」という問いに対して図を書いている誤答が見られたが、適切な名称で答えるような指導も必要である。また、図形の切断と勘違いし、正方形や円錐などの答えを書いたりする誤答もみられ、問題を正確によみとる力が十分に身に付いているとは言えない。

そこで、指導に当たっては、垂線や垂直二等分線、角の二等分線の意味を確実に理解させる必要がある。また、作図をする前にどこに、どんなふうに図ができあがるかイメージしてから、作図させることも必要である。作図をする活動を通して、垂線の作図の2種類の方法(直線上の点に引く場合と直線外の点から引く場合)を十分理解させることや垂直二等分線や角の二等分線との関係を理解させることが重要である。また、おうぎ形の弧の長さ、面積の求め方をしっかり理解させるとともに、中心角を求める方法を十分考えさせ身に付けさせることが必要である。公式を(円柱の体積) =  $r^2 h$ と覚えさせるだけでなく、(柱体) = (底面積) × (高さ)と理解させることも必要である。そして、円について周の長さや面積を求める場合をしっかりと区別させる必要がある。また、小学校5年生で円周率について3.14という近似値で学習しているが、単に公式を覚えさせるのではなく、円周率の意味を再度理解させるような配慮が必要である。基本的な問題にもかかわらず正答率が低かったのは、学習してから時間が経っていることも一つの要因であると思われる。そのため、短い時間でも復習の時間を確保することが大切である。



## 中学校第2学年

### (4) 理科

#### 分析結果の表記について

「小問ごとのねらいと正答率」の評価の欄の については、県正答率と予想正答率との差を記号化して示している。

- 1 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上高いもの.....
- 2 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上低いもの.....
- 3 1と2の間にあるもの .....

「小問ごとのねらいと正答率」の比較の欄の「H15」「全国」については、過去の基礎学力調査問題や全国教育課程実施状況調査問題と同一問題、類似問題であることを示している。

- 1 H15 ~ 平成15年度基礎学力調査問題と同一または類似問題
- 2 全国 ~ 平成13年度全国教育課程実施状況調査問題と同一または類似問題  
正答率と誤答率は、抽出調査した全人数に対する割合を表している。

誤答例については、抽出調査した中で、割合の高かったものを中心に記載している。



## (4) 理科

問題の構成とねらい

- ・ 8つの大問で構成し、第1分野の物理・化学領域、第2分野の生物・地学領域で学習する内容を偏りなく問う問題とした。
- ・ 学習指導要領の目標及び内容に基づき、基礎的・基本的な学習内容の定着をみる問題とした。
- ・ 自然現象についての知識・理解、観察・実験の技能・表現、科学的な思考について、学習内容の到達度を総合的にみる問題とした。

平均点 57.9点

小問ごとのねらいと正答率

大問	中問	内容	観点	ね	ら	い	大問別 正答率	小問別 正答率	予想 正答率	評価	比較
①	1	身のまわりの生物	知	顕微鏡の各部の名称を理解している。			63.4	80.9	80		全国
	2		技	顕微鏡の各レンズを正しい順序で取り付けることができる。				73.2	60		
	3		技	顕微鏡を正しく操作することができる。				31.9	35		
	4		知	顕微鏡の倍率について計算法を理解している。				70.7	70		
	5		技	観察しやすいようにプレパラートを移動できる。				60.3	50		
②	1	植物のくらしとなかま	知	エタノールで脱色され、葉が白くなることを理解している。			62.7	45.1	45		
	2		技	アルミニウムはくで覆った理由を説明できる。				65.6	60		
	3		知	光合成について理解している。				89.5	80		H15
	4		知	光合成に必要な気体名を理解している。				77.9	80		
	5		科	実験の結果から、光合成が葉緑体で行われることを指摘できる。				35.6	50		
③	1	動物のくらしとなかま	知	脳とせきずいを合わせて中枢神経ということを知っている。			71.6	67.0	55		
	2		知	感覚神経と運動神経の名称と刺激や命令の伝わり方を理解している。				71.1	70		
	3		知	反射の名称とそのしくみについて理解している。				76.7	60		
④	1	光・音・力	知	力のつり合いの条件を説明できる。			56.1	90.4	75		
	2		知	力のつり合いの条件を説明できる。				73.0	80		
	3		技	つり合う力を矢印で表すことができる。				75.1	60		H15
	4		知	物体が押す力の大きさは接触面積に関係なく等しいことを理解している。				25.0	50		
	5		知	力の大きさが等しい場合、接触面積と圧力の関係を理解している。				51.4	60		
	6		技	圧力の大きさを計算で求めることができる。				21.7	35		H15
⑤	1	光・音・力	知	焦点について理解している。			66.6	79.5	85		
	2		科	凸レンズによる像のでき方を考察できる。				65.5	35		全国
	3		知	虚像について理解している。				80.7	70		
	4		科	虚像ができることを利用したものを、身のまわりから考えて指摘できる。				40.8	55		
⑥	1	身のまわりの物質	知	フェノールフタレイン液の特性を理解している。			48.6	43.6	60		
	2		知	アルカリについての性質を理解している。				17.9	50		
	3		知	中和について理解している。				60.7	80		
	4		技	析出する結晶の取り出し方を理解している。				79.6	65		全国
	5		科	水溶液が酸性で、金属を入れると水素が発生することを推測できる。				41.3	40		
⑦	1	活きている地球	知	地震の発生場所の名称を理解している。			71.2	74.2	80		
	2		科	地震計の記録から震度の大きい地点を指摘できる。				93.3	70		
	3		技	地震計の記録から初期微動継続時間を読み取ることができる。				65.2	70		
	4		科	初期微動の速さを地震計の記録から計算によって求めることができる。				52.2	50		全国
⑧	1	電流の性質とはたらき	技	電気用図記号を使って回路図を作図できる。			48.0	50.4	40		
	2		技	電流と電圧の測定値からグラフをかくことができる。				63.1	50		
	3		知	実験結果の表やグラフから電流と電圧の関係を説明できる。				75.9	85		
	4		科	実験データから、オームの法則を用いて抵抗値を求めることができる。				38.3	40		H15
	5		科	並列回路に加わる電圧の特徴を理解し、電流の強さを求めることができる。				12.1	35		H15

観点は、知...「知識・理解」、技...「技能・表現」、科...「科学的な思考」を示している。

1 正答率 (63.4%)

問題番号	標準解答	正答率(%)		比較(%)	誤答例(%)	
1	接眼レンズ	74.6	80.9	全国 84.5 同一	レンズ (3.6)	無解答 (5.2)
	調節ねじ	87.1			レボルバー (2.2)	無解答 (1.2)
2		73.2			(17.2)	
3	ウ エ イ ア	31.9			エ イ ウ ア (11.4)	エ ウ イ ア (9.8)
4	600倍	70.7			55倍 (11.0)	無解答 (1.4)
5	ウ	60.3			イ (29.2)	

<考察>

顕微鏡を使って水中の微生物を観察することに関する問題である。特に、顕微鏡の各部の名称や操作方法など、顕微鏡の使い方に関する技能や理解をみる問題である。

問1については、顕微鏡の各部の名称を問う問題である。正答率が80.9%で、ある程度定着していると言える。この問題は、全国で行われた調査と同一問題でもあり、本県は全国平均よりやや低い正答率を示している。の調節ねじについては、高い正答率であるが、の接眼レンズの名称については低くなっている。問2と問4については、顕微鏡のレンズの取り付け方やレンズの倍率計算など基本的な問題である。正答率も73.2%で、ある程度定着していると言える。問3については、観察する際の顕微鏡の正しい操作を問う問題である。正答率が31.9%と低い。特に操作イと操作ウの操作順序の誤答が多かった。問5については、顕微鏡観察の際にプレパラートをどのように動かせば、観察したいものが視野の中央に移動できるかを問う問題である。正答率が60.3%で、プレパラートの動かし方が十分に身に付いているとは言えない。

そこで、指導に当たっては、顕微鏡の各部の名称や正しい操作方法を理解させ、なぜそのような操作をする必要があるのかという理由も押さえながら指導していくことが大切である。また、すべての生徒に顕微鏡操作の時間を十分に与え、正確な操作技能を身に付けさせた上で、観察・実験を行わせることにより、定着を図ることが大切である。

2 正答率 (62.7%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	白色	45.1		青紫 (10.8) 透明 (3.4)
2	葉に光を当てないようにするため	65.6		光合成を防ぐため (2.8) デンプンがどうできるか調べるため (2.0) 無解答 (2.6)
3	光合成	89.5	H15 91.9 類似	葉緑体 (0.8) 無解答 (2.8)
4	二酸化炭素	77.9		酸素 (12.6) 無解答 (1.4)
5	葉緑体	35.6		日光 (26.6) 光 (10.2)

<考察>

植物の葉による光合成に関する問題である。アサガオの葉を使って、葉が光合成を行う器官であること、光合成は二酸化炭素と水を吸収し、これらを使って光をエネルギー源としてデンプンなどを合成し、酸素を放出する現象であることを理解しているかをみる問題である。

問1については、エタノールによって葉緑体の色素が抽出され、葉の緑色の部分がどのようになるかを問う問題である。正答率が45.1%で、エタノールに緑色の葉をつける理由を十分理解しているとは言えない。問3については、光合成という名称を問う問題である。この問題は、昨年度との類似問題であり、正答率が89.5%である。昨年度よりやや低い正答率を示しているが、十分定着していると言える。問4については、光合成を行うために二酸化炭素が必要であることを問う問題である。正答率が77.9%で、酸素という誤答も多いことから、呼吸による物質の出入りと間違えてとらえていると言える。問5については、ふ入りの葉には葉緑体がなく、ヨウ素デンプン反応がなかったことから、光合成が行われなかったことを理解しているかを問う問題である。正答率は35.6%で、日光という誤答が多く、ふ入りの葉について理解していないことや、光合成に必要な条件について何を比較検証しようとしている実験なのかを十分に理解していないことが考えられる。

そこで、指導に当たっては、植物の観察を通して葉の基本的なつくりの特徴を見い出させ、どのような仕組みで光合成が行われるのかということについて、観察・実験の結果から考察させるようにしたい。また、考察させる際には、なぜそうなるのかという根拠を考えさせるようにし、科学的な思考を深めていく場を設定することが大切である。

3 正答率 (71.6%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	誤答例(%)	
1	中枢神経	67.0	未しょう神経 (3.2)	無解答 (4.2)
2	a 運動神経	71.8	71.1	感覚神経 (9.2) 無解答 (7.2)
	b 感覚神経	70.3		運動神経 (10.4) 無解答 (8.6)
3	(1) 反射	88.7	76.7	反射神経 (1.4) 無解答 (3.2)
	(2) せきずい	64.7		脳 (17.0) 感覚神経 (1.4)

<考察>

動物の外界の刺激に対する反応の仕組みに関する問題である。感覚器官で受け取った刺激が、感覚神経を伝わってせきずいや脳に達し、命令が運動神経を伝わって筋肉での反応が起こる仕組みを理解しているかをみる問題である。

各問とも、予想正答率を上回っており、本問の内容については、ある程度定着していると言える。しかし、問1については、誤答例以外にもさまざまな誤答があり、すべての生徒が十分に理解しているとは言えない。問2については、感覚神経と運動神経のはたらきを反対に理解している誤答が多く、それぞれの神経のはたらきの違いに留意させながら指導する必要がある。問3(2)については、「脳」の誤答が多く、反射における刺激の伝わり方の違いや脳とせきずいのはたらきの違いについて、十分に理解しているとは言えない。

そこで、指導に当たっては、各神経の特徴について正確に理解させるために、名称とその役割をそれぞれ比較させながら、ノートなどに正確にまとめさせるなどの指導が必要である。また、反射が生命を守る重要な反応であることにも触れながら、日常生活の事象と結び付けてとらえさせるようにしたい。なお、資料集やVTRなどの映像資料を積極的に活用し、内容を理解しやすくする工夫を行うことも大切である。さらに、図中に用語を書き込ませる問題などにも取り組ませ、確実に定着させるように指導する必要がある。

4 正答率 (56.1%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ウ	90.4		イ (2.2)
2	エ	73.0		ア (9.8) ウ (5.8)
3	省略	75.1	H15 17.7 類似	矢印の長さが違う (7.6) Dから矢印を引いている (2.8)
4	$A = B = C$	25.0		$A < B < C$ (21.4) $B = C < A$ (6.4)
5	$A < B < C$	51.4		$C = B < A$ (4.4) 無解答 (7.8)
6	1500 N/m <sup>2</sup>	21.7	H15 23.0 類似	15 N/m <sup>2</sup> (6.0) 無解答 (10.4)

<考察>

力と圧力に関する問題である。実験 では、2つの力がつりあう条件、実験 では、面を押す力と圧力の違い、圧力と面積の関係、圧力の求め方を理解しているかをみる問題である。

問1については、2つの力がつりあうための条件のうち、2つの力の大きさは等しいことを理解しているかを問う問題である。正答率が90.4%で、ほとんどの生徒が日常生活の経験から理解していることが分かる。問2と問3については、2つの力がつりあうための条件のうち、2つの力は同一直線上にあることと2つの力がつり合うように作図する力を問う問題である。正答率は、ともに問1と比べると低くなっている。問3は、昨年度との類似問題であり、正答率が75.1%で、昨年度よりかなり高い正答率を示している。これは、本年度の作図の問題では、作用点の位置が生徒にとって分かりやすかったことや、普段の授業において作図の指導が十分に行われているためと考えられる。問4については、面全体を押す力について、圧力との違いを理解しているかを問う問題である。正答率が25.0%で、圧力と混同した誤答が多く、面全体を押す力と圧力との違いを十分に理解していないと思われる。また、等号や不等号を使った解答の仕方に慣れていないことも考えられる。しかし、問5については、正答率が51.4%である。日常生活の経験などから、押す力の大きさが等しい場合の接触面積とスポンジのへこみ具合(圧力)の関係について理解できていることが分かる。問6については、面積の単位換算をとともう圧力の計算の問題である。正答率が21.7%で、与えられた数値から圧力を計算する力が十分に身に付いているとは言えない。この問題は、昨年度との類似問題であり、昨年度よりやや低い正答率を示している。これは、本年度の問題は面積を求めることと圧力を求めることの二つの計算を必要とする問題構成にしたことによって、昨年度より難易度が上がったためと考えられる。また、昨年度に続いて正答率が低かったことから、圧力の公式を正確に理解していなかったり、単位換算を含めた計算を苦手としていたりすることが分かる。

そこで、指導に当たっては、2つの力のつりあいに関して、実験を通してつりあうための条件を理解させておく必要がある。また、作図については、昨年度の問題のように、天井からぶら下げたおもりの重力とつりあう力の作図も含めて、数多く演習を行い、慣れさせておく必要がある。さらに、面全体を押す力と圧力の違いを明確に区別し、それぞれがどのような力を意味しているのかを、レンガとスポンジなどの具体物を使いながら理解させておくことが重要である。その上で、圧力の公式を理解させ、計算によって正確に求めることができるように計算力を付けさせておくことが大切である。特に、100gの物体にはたらく重力の大きさが1Nであること、 $1\text{ m}^2 = 100\text{ cm} \times 100\text{ cm}$ であることについて、十分に指導しておく必要がある。

5 正答率 (66.6%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	焦点	79.5		焦点距離 (1.2) 無解答 (4.0)
2	ウ	65.5	全国 45.5 同一	ア (9.8)
3	虚像	80.7		実像 (11.2) 誤字脱字 (2.2)
4	ア	40.8		イ (25.2)

<考察>

凸レンズの実験を通して、実像と虚像ができる条件及び実像の位置・大きさ・形についての規則性を理解しているかをみる問題である。

問2については、凸レンズを通過した物体の像が、スクリーンにどのように映っているかを問う問題である。正答率が65.5%で、予想正答率を大きく上回っている。この問題は、全国で行われた調査と同一問題でもあり、本県は全国平均より高い正答率を示している。これは、生徒が比較的苦手意識をもっている分野であるため、実験を通して確実に理解力を高めようという指導の成果であると考えられる。なお、誤答例から、実像が倒立になることは理解しているが、左右逆になることやスクリーンの後ろから見た像を解答することによる誤答があったことが分かる。問3については、高い正答率を示しており、ある程度定着していると言える。問4については、虚像のできる原理を利用した日常生活の機器を選択させる問題である。正答率が40.8%で、予想正答率よりも低くなっている。誤答例に「カメラ」が多かったのは、選択肢の中で最も身近な機器であり、カメラで遠くのものが大きく見えた実体験による選択のためと考えられる。

そこで、指導に当たっては、まず凸レンズに平行光線を当て、光が集まる点が焦点であることを理解させる。次に、スクリーンに物体の像を映す実験を通して、物体と凸レンズの距離、凸レンズとスクリーンの距離の関係やスクリーンにできる像の大きさや向きを理解させたい。その際、実像は倒立で上下逆になるだけでなく、左右逆になることも確実に押さえておきたい。また、実像や虚像のできる原理が、日常生活にどのように活用されているかについて、身の回りの道具や機器などを取り上げて指導する必要がある。



6 正答率 (48.6%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)	
1	イ	43.6		ア (15.4)	エ (15.2)
2	アルカリ	17.9		アルカリ性 (19.2)	無解答 (15.8)
3	中和	60.7		状態変化 (5.0)	無解答 (11.4)
4		79.6	全国 71.4 類似	(4.8)	(3.8)
5	水素	41.3		二酸化炭素 (27.0)	酸素 (11.8)

< 考察 >

中和反応に関する問題である。酸とアルカリ，中和についての基本的な内容や塩を析出する実験装置を理解しているかをみる問題である。

問1については，フェノールフタレイン液が，アルカリ性で何色になるかを問う問題である。正答率が43.6%で，予想正答率よりも低かった。これは，黄色や青色と解答した誤答例が多いことから，BTB液の色の变化と間違っていることが言える。また問2については，反応結果からアルカリという名称を答えさせる問題である。正答率が17.9%で，予想正答率よりもかなり低かった。これは，アルカリ性という誤答が多かったことから，アルカリとの違いについて正確に理解していないためと考えられる。問4については，塩を結晶として取り出す実験装置を問う問題である。正答率が79.6%で，ある程度定着していると言える。この問題は，全国で行われた調査との類似問題でもあり，本県は全国平均より高い正答率を示している。これは，中和した水溶液から塩を取り出す実験について，授業で確実にやりながら定着を図っている成果と考えられる。問5については，酸性の水溶液に金属を加えたときに発生する気体名を問う問題である。正答率が41.3%で，十分に定着しているとは言えない。二酸化炭素の誤答が多いことから，塩酸と二酸化炭素の発生とを関連付けてとらえており，この問題の意味を十分に理解しないまま解答していることが考えられる。

そこで，指導に当たっては，問題文を含め重要な語句について，教科書などでしっかりと読み取らせることが重要である。また，できるだけ少人数のグループで実験させるようにしたい。生徒実験として取り扱うことが難しい場合には，なるべく演示実験を行うようにし，少しでも学習内容を印象付けながら定着を図るように心がけることが大切である。例えば，フェノールフタレイン液の色の变化については，アンモニアの噴水実験を行うことによって，現象への驚きや感動をもたせながら，視覚的にとらえさせることができる。さらに，重要な語句に関して定着を図るために，小テストなどを行うことも有効である。

7 正答率 (71.2%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	震源	74.2		震央 (6.2) 無解答 (3.6)
2	A	93.3		C (1.2)
3	ウ	65.2		エ (10.8)
4	ウ	52.2	全国 42.6 同一	イ (13.8)

<考察>

地震とそのゆれの伝わり方に関する問題である。地震に関する基本的な内容と地震によって生じる2つの地震波の特徴について理解しているかを問う問題である。

問1と問2については、震源の語句と震度の大きい地点を問う問題である。問1で、震央の誤答は見られるが、どちらも定着していると言える。特に問2については、極めて高い定着率であると言える。これは、地震計の記録や距離のデータから、視覚的にとらえることが可能だったためと思われる。問3については、ある地震波のデータから初期微動継続時間を読み取る問題である。正答率が65.2%で、ある程度定着していると言えるが、グラフの読み取りを間違えて、エの45秒と解答している誤答がある。問4については、初期微動の到達時間をグラフから読み取り、震源からの距離とで計算し、初期微動の速さを求める問題である。正答率が52.2%で、選択問題であるにもかかわらず誤答が多い。これは、震源からの距離を、2つの時刻の差で割って速さを求めることになるため、複数のデータから正解を導く計算方法や正確に計算する力が十分に身に付いていないことが原因と考えられる。この問題は、全国で行われた調査と同一問題でもあり、本県は全国平均よりかなり高い正答率を示している。これは、地震計のゆれを記録したグラフから初期微動の速さを求める問題について、グラフから必要な数値を読み取り、計算できる力の定着を図るための取組が、各学校で行われている成果であると考えられる。

そこで、指導に当たっては、震源や震央、初期微動や主要動などの名称について、相違点に留意しながら押さえていくことが必要である。また、地震波のグラフにあるデータが、何を意味しているのかを理解させ、初期微動継続時間と震源距離の比例関係を把握させるようにしたい。さらに、震源までの距離や初期微動、主要動の速さを求める計算については、演習問題により、その計算方法を習熟させ、定着を図る必要がある。

8 正答率 (48.0%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	省略	50.4		導線の結び目がない (11.6) 電気用図記号の間違い (8.8)
2	省略	63.1		プロット記入不足 (14.2) 原点を通らない (5.8) グラフを2本かいている (4.2)
3	比例関係	75.9		等しい (2.4) 無解答 (6.2)
4	20	38.3	H15 45.0 類似	2 (7.6) 無解答 (9.2)
5	0.9 A	12.1	H15 19.3 類似	0.6 (9.4) 無解答 (14.8)

< 考察 >

抵抗器に加わる電圧と、そのとき流れる電流との関係に関する問題である。

問1については、電気用図記号を使って回路図を作図することができるかをみる問題である。正答率が50.4%で、予想正答率より高かった。導線の結び目がないために誤答となっている割合が高い。問2については、電圧と電流の測定値を基にグラフをかくことができるかをみる問題である。正答率が63.1%で、正しくグラフをかくことについては、ある程度定着していると言える。しかし、プロット記入不足の誤答が多く、測定値をプロットすることでグラフに正確にかき込むことの大切さや、0の値も測定値であることを十分理解していないことが考えられる。問4については、オームの法則を用いて、測定値から抵抗値を求めることができるかをみる問題である。正答率が38.3%で、抵抗値を求めるのに必要な測定値を使って計算する力が十分に身に付いているとは言えない。問5については、並列回路に加わる電圧の特徴を理解し、回路全体に流れる電流の強さを求めることができるかをみる問題である。正答率が12.1%で、測定値にない電圧の大きさから、並列回路における各抵抗器に加わる電圧の大きさを求め、オームの法則を使って回路全体に流れる電流の強さを求めていく総合的な力が十分に身に付いているとは言えない。この問4と問5の問題は、昨年度との類似問題であり、昨年度より低い正答率を示している。これは、問4については、昨年度は流れる電流の強さを求める問題と抵抗値を求める問題との2問に分けられていたこと、同様に問5についても、並列回路の2つの抵抗器に加わる電圧を求める問題と回路全体に流れる電流の強さを求める問題との2問に分けられていたことが、正答率の下がった要因として考えられる。つまり、類似問題ではあるが、段階的に問うていないために、難易度が昨年度に比べて上がっているためと考えられる。しかし、無解答の割合が高いことから、計算方法を理解していなかったり、小数点を含む計算力が十分に身に付いていなかったり、このような問題に対する苦手意識をもっていることが原因として考えられる。

そこで、指導に当たっては、回路図をかくことやグラフをかくことを正確に行わせるようにし、実験レポートなどを使いながら時間を十分確保して何度も作図させることが大切である。また、オームの法則を使う計算については、特に、小数点を含む計算を正確にできるようにしておくことが必要である。小テストや家庭学習の課題なども有効に使いながら、このような問題に慣れさせ、問題を見て計算方法が分かるようになるまで、繰り返し問題に当たらせておくことが必要である。



## 中学校第2学年

### (5) 英語

#### 分析結果の表記について

「小問ごとのねらいと正答率」の評価の欄の については、県正答率と予想正答率との差を記号化して示している。

- 1 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上高いもの.....
- 2 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上低いもの.....
- 3 1と2の間にあるもの .....

「小問ごとのねらいと正答率」の比較の欄の「H15」「全国」については、過去の基礎学力調査問題や全国教育課程実施状況調査問題と同一問題、類似問題であることを示している。

- 1 H15 ~ 平成15年度基礎学力調査問題と同一または類似問題
- 2 全国 ~ 平成13年度全国教育課程実施状況調査問題と同一または類似問題  
正答率と誤答率は、抽出調査した全人数に対する割合を表している。

誤答例については、抽出調査した中で、割合の高かったものを中心に記載している。



(5) 英語

調査問題の構成とねらい

- ・ 4つの大問で構成し、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4領域を問う問題とした。
- ・ 学習指導要領の目標及び内容に基づき、教科書での学習事項の定着度をみる問題とした。
- ・ 知識・理解だけでなく、思考力、判断力及び表現力も含めて、学習達成状況を総合的にみることが出来る問題とした。

平均点 69.4点

小問ごとの内容・ねらい

大問	領域	小問	観点	内容・ねらい	大問別 正答率	小問別 正答率	予 想 正答率	評価	比較
1	聞くこと	1	(1) 理解	英文を聞き、絵を説明する英文を聞き取ることができる。	86.6	93.4	90		H 1 5
			(2) 理解	英文を聞き、絵を説明する英文を聞き取ることができる。		92.1	90		
			(3) 理解	英文を聞き、絵を説明する英文を聞き取ることができる。		70.7	60		H 1 5
			(4) 理解	英文を聞き、絵を説明する英文を聞き取ることができる。		90.3	90		
		2	(1) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えとして適切な絵を選ぶことができる。		98.2	90		
			(2) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えとして適切な絵を選ぶことができる。		87.4	90		
			(3) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えとして適切な絵を選ぶことができる。		98.5	90		
			(4) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えとして適切な絵を選ぶことができる。		94.6	90		
		3	(1) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えを選ぶことができる。		85.6	80		
			(2) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えを選ぶことができる。		76.4	80		
			(3) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えを選ぶことができる。		63.3	80		
			(4) 理解	対話を聞き、対話の内容に関する質問の答えを選ぶことができる。		88.7	80		
2	話すこと	1	(1) 表現	絵の内容に関する質問の答えとして適切な表現を選ぶことができる。	83.2	77.3	80		
			(2) 表現	絵の内容に関する質問の答えとして適切な表現を選ぶことができる。		56.9	80		
			(3) 表現	絵の内容に関する質問の答えとして適切な表現を選ぶことができる。		94.2	80		
			(4) 表現	絵の内容に関する質問の答えとして適切な表現を選ぶことができる。		97.1	80		
			(5) 表現	絵の内容に関する質問の答えとして適切な表現を選ぶことができる。		73.2	80		
		2	(1) 表現	対話文を読み、場面に合う表現を選ぶことができる。		91.8	80		全国
			(2) 表現	対話文を読み、場面に合う表現を選ぶことができる。		94.7	55		
			(3) 表現	対話文を読み、場面に合う表現を選ぶことができる。		66.4	55		H 1 5
			(4) 表現	対話文を読み、場面に合う表現を選ぶことができる。		94.6	80		
			(5) 表現	対話文を読み、場面に合う表現を選ぶことができる。		67.6	70		
		3	(1) 表現	提示された状況に合う、適切な表現を選ぶことができる。		96.6	80		
			(2) 表現	提示された状況に合う、適切な表現を選ぶことができる。		85.9	70		
(3) 表現	提示された状況に合う、適切な表現を選ぶことができる。		86.9	70		H 1 5			
(4) 表現	提示された状況に合う、適切な表現を選ぶことができる。		82.0	70					
3	書くこと	1	(1) 言語	日常生活に関わる基本的な語を書くことができる。	57.2	38.5	60		
			(2) 言語	日常生活に関わる基本的な語を書くことができる。		37.9	60		
			(3) 言語	日常生活に関わる基本的な語を書くことができる。		81.7	70		
		2	(1) 表現	与えられた語を並べかえ、適切な英文を完成することができる。		86.4	70		
			(2) 表現	与えられた語を並べかえ、適切な英文を完成することができる。		63.2	50		H 1 5
			(3) 表現	与えられた語を並べかえ、適切な英文を完成することができる。		92.4	70		
			(4) 表現	与えられた語を並べかえ、適切な英文を完成することができる。		63.8	60		
		3	(1) 表現	友だちに関する指示された内容の紹介文を英文で答えることができる。		25.2	50		全国
			(2) 表現	友だちに関する指示された内容の紹介文を英文で答えることができる。		25.4	50		全国
4	読むこと	1	(1) 言語	英文の内容を読み取り、空所に入る適切な語を選ぶことができる。	67.0	75.5	50		
			(2) 言語	英文の内容を読み取り、空所に入る適切な語を選ぶことができる。		82.2	50		
			(3) 言語	英文の内容を読み取り、空所に入る適切な語を選ぶことができる。		77.4	50		
			(4) 言語	英文の内容を読み取り、空所に入る適切な語を選ぶことができる。		19.8	60		
		2	(1) 理解	メール文を読み、適切な内容を選ぶことができる。正答(ウ)		87.5	70		
			(2) 理解	メール文を読み、適切な内容を選ぶことができる。正答(オ)		91.9	70		
		3	(1) 理解	メール文を読み、その内容に関する質問について答えることができる。(自販機)		42.5	60		
			(2) 理解	メール文を読み、その内容に関する質問について答えることができる。(車の運転)		59.8	60		
			(1) 理解	対話文を読んで、その内容に関する質問について答えることができる。		84.3	70		
			(2) 理解	対話文を読んで、適切な内容を選ぶことができる。		51.5	60		
(3) 理解	対話文を読んで、その内容に関する質問について適切なものを選ぶことができる。	64.4	60						

\* 観点 ・ 理解(理解の能力) ・ 表現(表現の能力) ・ 言語(言語や文化に関する知識・理解)

1 正答率 ( 86.6% )

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)	
1	( 1 )	ウ	93.4	H15 96.8 類似	ア( 3.6) イ( 3.0)
	( 2 )	イ	92.1		ア( 3.8) ウ( 2.8)
	( 3 )	ア	70.7	H15 62.0 類似	ウ(12.4) イ( 4.8)
	( 4 )	イ	90.3		ウ( 6.8) ア( 1.8)
2	( 1 )	ウ	98.2		イ( 0.4) 無解答( 0.2)
	( 2 )	ア	87.4		ウ( 8.8) イ( 2.6)
	( 3 )	イ	98.5		ア( 1.2) ウ( 0.2)
	( 4 )	ウ	94.6		ア( 4.0) イ( 1.2)
3	( 1 )	ア	85.6		イ( 9.8) ウ( 4.6)
	( 2 )	イ	76.4		ウ( 7.6) ア( 4.0)
	( 3 )	ア	63.3		イ(17.8) ウ( 3.6)
	( 4 )	ウ	88.7		ア( 4.8) イ( 2.8)

考察

英語を聞く力をみる問題である。問1では、英文を聞き、与えられた絵を説明する英文の内容を聞き取る力を問うた。問2は、短い対話を聞いたあとで、対話の内容に関する質問を聞き、答えとして適切な絵を選ばせる問題であり、対話の内容と質問の内容を聞き取る力を問うた。問3は、やや長い対話を聞き、問題用紙に書かれた日本語の質問に対する答えとして適切なものを選ばせる問題であり、対話の概要を聞き取る力を問うた。

問1の(3) between, 問2の(2) under など、位置関係を示す語の聞き取る力を問う問題の正答率が他の問題に比べるとやや低い。問1の(3) between は前年度との比較の問題であり、前回より8.7ポイント上昇している。位置関係を表すものを含め、前置詞の用い方に関する指導が、語のみの指導になっている傾向がある。句や文として提示しながら実際の場面を参考にさせるなど、まとまりのある表現を用いての指導や視覚的に提示する指導が十分になされていない実態がうかがえる。また、問1の(1)は経年比較の問題であったが、3.4ポイント下がったものの、93.4%の正答率であり、動詞cleanや現在進行形の表現に慣れていると考えられる。問2の(1),(3),(4)は対話を聞いて、場面を表す絵を選ぶ問題であるが、正答率がそれぞれ98.2%、98.5%、94.6%と非常に高かった。それぞれ、対話中に出てくる English, Orange juice 及び window などの語が正確に聞き取れている。このことは、ふだんの指導を通して基本的な語の音声に慣れているためだと思われる。問3の(3)は正答率が63.6%と、1の中で最も低く、イ(tennis)と答えた生徒が17.8%と多かった。これは対話の内容をつかんでいく際に、swimming の聞き取りが十分にできていないためと思われる。問3の(2)の正答率が76.4%と1の中では低かったのは、登場人物までは理解できたものの、本文の内容を十分に理解できていないためと考えられる。

そこで、指導に当たっては、前置詞の指導を行う際、語だけの指導で終わらないようにし、既習の語を用いた句や文を提示することが大切である。同時に、生徒が理解しやすいように、実際の場面を表す絵などの視覚的な教材を取り入れて、句などのまとまりをもった表現で指導していく必要がある。また、対話の内容を理解させる指導を行う際、対話における内容をつかむために、重要な語に気付かせる活動が必要である。日頃から聞き取りの視点を示し、視点を意識した聞き取りの活動が行えるようにし、漫然と聞かせるだけの指導で終わらないように留意する必要がある。さらに、短い文からまとまりのある文章へと段階を踏んで量を増やしていき、その内容や概要を日本語または簡単な英語でまとめさせる活動へと発展させていくことが大切である。



2 正答率 (83.2%)

問題番号	標準解答	正答率 (%)	比較 (%)	誤答例 (%)	
1	(1)	イ	77.3		ア( 6.2) ウ( 0.6)
	(2)	ウ	56.9		イ(13.4) ア(11.2)
	(3)	ウ	94.2		ア( 4.0)
	(4)	ア	97.1		
	(5)	イ	73.2		ウ(16.2) ア( 3.0)
2	(1)	ウ	91.8	全国80.9 類似	イ( 3.8) ア( 2.4)
	(2)	ア	94.7		
	(3)	ア	66.4	H15 57.6 類似	ウ(14.8) イ( 5.6)
	(4)	イ	94.6		ウ( 5.0)
	(5)	イ	67.6		ア(17.8) ウ( 3.2)
3	(1)	ウ	96.6		ア( 3.2)
	(2)	イ	85.9		ア( 9.6) ウ( 3.4)
	(3)	ア	86.9	H15 24.0 同一	ウ( 5.4) イ( 5.2)
	(4)	ア	82.0		イ(12.0) ウ( 1.8)

考察

英語を話す力をみる問題である。問1では、与えられた絵の内容に関する英文の質問に対して、適切に答える力を問うた。問2は、短い対話文を読んで、対話文中の空欄に当てはまる表現を考えさせる問題であり、自然な対話を行うことができる力を問うた。問3は、指示された状況において、どのように英語で表現するのが適切であるかを考えさせる問題であり、状況を踏まえて適切な表現で英語を話すことができる力を問うた。

問1の(2)は、正答率が56.9%と、2の中で最も低い正答率であった。イ(They are three.)やア(Yes, there are.)と答えている生徒が、それぞれ13.4%、11.2%と目立つ。これは、How many ~ are there ~?を用いた英語の応答に日頃慣れていないためと考えられる。問2の(1)は、全国との比較をみる問題であるが、正答率が91.8%と、全国に比べて10.9ポイント高い。普段の授業で自然なあいさつを行う場を設定したり、ALTの訪問などを利用して、初対面のあいさつで用いる表現に慣れ親しませたりしているためだと考えられる。(3)は、昨年度との比較をみる問題であるが、昨年度に比べ正答率が8.8ポイント伸びている。店など言語の使用場面を取り入れ、生徒が実際に英語を話す学習活動が行われつつあるためと考える。(5)に関しては、正答率が67.6%とやや低く、ア(Yes, I will.)と答えた生徒が17.8%と多く見られた。これは、空欄の前後をよく考えず、空欄の前のみで判断したり、willで聞かれたらwillで答えるものだと思いきなりしたためだと考えられる。問3の(3)も昨年度との比較をみる問題であるが、正答率が86.9%と、昨年度に比べ、62.9ポイント上昇した。これは、昨年度が英作文形式の出題であったのに対して、今年度は選択式の出題であったことによるものと考えられる。

そこで、指導に当たっては、適切な英語での応答が行えるようにするために、How many ~?など、疑問詞を用いた英問英答などに日頃から慣れさせておく必要がある。例えば、授業の冒頭で、疑問詞を用いながら、個に応じた英語の質問を行い、英語で答えさせることに慣れさせていくのも効果的である。また、教科書の本文や教師や生徒が話した英語の内容について、確認させる活動を英問英答の形式で行い、内容が正しいかそうでないかばかりでなく、適切な応答の仕方の経験を徐々に積み上げていくことも大切である。一方、場面に即した自然な対話が行えるようにするために、言語の使用場面を考慮した設定の中で、対話の活動を行うことは大切なことである。しかし、問答が機械的に暗記して繰り返すだけにとどまらないように、予想される反応を選択して対話の内容を変化に富むものにしていきながら、臨機応変に対話を続けていく力を身に付けさせる必要がある。

3 正答率 (57.2%)

問題番号	標準解答	正答率 (%)	比較 (%)	誤答例 (%)
1	(1) white	38.5		whait( 2.8) write( 1.8) where( 1.6) waite( 1.0) 無解答(28.2)
	(2) fall	37.9		from( 2.0) fool( 2.0) foll( 1.8) foul( 1.2) 無解答(25.0)
	(3) Friday	81.7		Fryday( 2.0) father( 0.4) 無解答( 6.0)
2	(1) How is the weather today?	86.4		How the weather is today?( 5.4) How weather is the today?( 1.2)
	(2) You must do your homework.	63.2	H15 46.0 類似	Do you must your homework?(14.2) You must your homework do.( 1.4)
	(3) Shall we go to the baseball game?	92.4		We shall go to the baseball game.( 1.8) We shall go to.( 1.4)
	(4) What time do you have breakfast?	63.8		What do you have time breakfast?( 9.6) What do you have breakfast time?( 4.6)
3	(1) Mary came to Japan last year.	25.2	全国57.6 類似	Mary is come to Japan last year.( 1.4) She is went to Japanese one years ago. ( 1.2) 無解答(25.2)
	(2) She walks to school.	25.4	全国53.4 類似	Mary walk to school.( 3.6) Walk to school.( 1.2) 無解答(20.4)

考察

主として、英語を書く力をみる問題である。

問1では、与えられた語を手がかりに、関連のある語を正確に書くことができるか、言語に関する知識を基本的な語について問うた。問2は、日本語で示された内容を表せるように、与えられた語句を並べかえて、適切な英文を完成する問題であり、文型や文法事項などの言語材料を適切に用いて英文を構成する力を問うた。問3では、友だちに関する紹介文を、与えられた条件に従って、英語で書く力を問うた。

日常生活に関する基本的な語を書いて答える問1の(1)・(2)については、正答率がそれぞれ、38.5%、37.9%と、かなり低くなっている。逆に、無解答の率がそれぞれ、28.2%、25.0%と高い。誤答例で示してあるような誤答を含め、様々なスペルミスが見られたが、語を正確に覚えていないことが明瞭である。既習の語を繰り返し用いることをしなかったり、基本的な語を書かせる場面の設定や課題の提示が十分に行われていなかったりしていることが原因であると思われる。問2の(2)は前年度との比較の問題であるが、昨年度に比べ、正答率が17ポイント上がっている。must など助動詞を使った表現を授業の中でよく用いるなど、生徒がその使い方に慣れる手立てが取られつつあると思われる。一方、Do you must ~?といった誤答率が14.2%も見られることから、do が一般動詞として用いられる英文に日頃から親しんでいない実態もうかがえる。また、(1)の天気をたずねる表現や(3)のShall we ~?を使って人を誘う表現については、あいさつで用いたり、対話文中に取り入れたりすることで、よく理解できていると思われる。(4)のWhat time ~?を用いて時間を問う表現の正答率が63.8%と、(1)や(3)に比べてあまり高くないのは、What do you have ~?といった誤答例が示しているように、疑問詞を用いた様々な表現を用いる指導が十分になされていないためであると思われる。

問3の(1)・(2)は、ともに全国との比較の問題であるが、全国の正答率に比べ、正答率がそれぞれ、25.2%、25.4%と、大変低く、逆に無解答の率がそれぞれ、25.2%、20.4%と高い。書くことを苦手とする生徒が多くいると考えられるが、語を書いたり、基本文を書いたりする活動も含め、英語を書かせる指導が不足していることが原因であると思われる。そこで、指導に当たっては、基本的な語が正確に書けるようにするために、語を書かせる場面を設けたり、精選した基本的な語を家庭学習等で書かせたりすることが大切である。その際、小テストを計画的・継続的に実施し、実施が終わるごとにフラッシュカード等を用いながら音声や意味の確認を行う活動を取り入れていくことが望ましい。また、do など複数の意味や働きをもつ語の指導や、What time ~?など疑問詞が含まれる多様な表現の指導においては、日頃の授業の中で生徒が聞いたり、答えたりする場面を取り入れることで、その使い方に慣れさせることが必要である。例えば、疑問詞を用いた様々な表現は、授業の冒頭で個に応じたあいさつを行う

場面でも、計画的な指導が十分可能である。さらに、与えられた状況を説明するなど、既習事項を用いて英文を書かせる指導においては、語を書かせる場面を設けたり、精選した基本的な語を家庭学習等で書かせたりすることを土台にしながら、授業の終末などで授業で用いた新出の表現や生徒が対話の活動等で実際に使った表現を書かせることが大切である。一般的に、英文を書くことについては、他の活動に比べて個人差が大きいことから、書かせる内容を個人で選択させたり、興味のあることを中心に書かせたりするなど、個々の生徒の実態に応じて段階的に指導していくことが望まれる。

4 正答率 (67.0%)

問題番号	標準解答	正答率 (%)	誤答例 (%)
1	(1) オ	75.5	ウ(6.4) エ(2.2) キ(2.2)
	(2) ク	82.2	エ(3.8) カ(3.4) ウ(3.2)
	(3) キ	77.4	イ(7.0) カ(2.2) エ(2.0)
	(4) カ	19.8	ア(16.8) イ(9.8) オ(6.8)
2	(1) ウ	87.5	ア(6.4) イ(4.2) エ(4.0)
	オ	91.9	
	(2) 自動販売機があまりないことと高校生〔のトム〕が車を運ぶこと	42.5	自販機がなかったこと(4.4) 色々な自販機がある。(2.0) 無解答(28.2)
3	(1) 〔中国にいる〕妹(姉)に〔誕生日の〕手紙を送るため	84.3	手紙を送るため(3.6) 手紙を送りたかった。(1.2) 日曜日(は妹(姉)の誕生日だから(1.2) 手紙を出すために行きたかった。(1.0) 無解答(8.0)
	(2) ウ	51.5	イ(16.4) エ(11.6) ア(2.4)
	(3) B	64.4	C(9.4) E(5.2) A(4.6) D(4.6)

考察

主として、英語を読む力をみる問題である。問1は、与えられた短い英文の内容を読み取り、空欄に入る適切な語を選択する問題であり、基本的な語の用い方に関する知識を問うた。問2は、メール文を読み、その内容について適切な内容を選んだり、与えられた問いに日本語で答えたりする問題であり、初歩的な英文の内容を正確に読み取る力を問うた。問3は、対話文を読んで、その内容に関する日本語の質問に答えたり、適切な内容を選択したりする問題であり、初歩的な英語が用いられた対話文の内容を読み取る力を問うた。

問1は(4)を除き、全体的に高い正答率であった。短い英文における基本的な語の用い方や意味を理解することが、日頃の指導を通して、おおむね身に付いていると言える。しかし、(1)では、like の使い方が適切でなかったり、(3)では、単数形と複数形の使い分けが適切でなかったりするなど、動詞や代名詞の理解が不十分な誤答も見られる。また、(4)の正答率が19.8%と低い結果となっているが、「持っている」という意味以外に、動詞 have の様々な表現に、日頃十分慣れていないためであると思われる。問2の(1)については、高い正答率であり、メール文の内容がよく理解できている。選択肢の内容を本文と照らして確認する際、本文で用いられている語や英文の意味が理解できた結果であると思われる。しかし、(2)の問いのように具体的な内容を自分で考えて答える問題の正答率が42.5%及び59.8%と低い。無解答もそれぞれ28.2%及び27.2%と高い。内容はおおむね理解できていても、代名詞 that の示している内容が具体的に何かを考えながら、本文を細かく読み取る力が不足していると言える。問3の(1)については、正答率が84.3%と高いのに対し、(2)では正答率が51.5%と低い。(1)も(2)も、ともに対話文の内容について問うた問題であるが、(2)では take の意味を正しく理解できていないために、適切に解答できなかったと思われる。また、China と Canada を勘違いして答えてしまった誤答も目立つ。また、(3)については、Cを選んだ誤答が9.4%と目立つ。これは、文中の You can see it on your left. が十分理解できなかったものと思われる。特に、left の意味を理解していないことが原因であると思われる。

そこで、指導に当たっては、英文の内容を正しく読み取ることにつながる語の適切な用い方を指導する際、既習の語をはじめ、新出の語の指導を徹底する必要がある。3でも触れたように、語の小テストを計画的・継続的に実施したり、フラッシュカード等を用いながら音声や意味の確認を行ったりする活動を取り入れていくべきである。中でも、like や have のように、多義性をもつ語については、文で提示することにより、その使い方や意味の違いを明確に指導

していきたい。これらのことは、問3のような対話文の内容を正確に理解させる上でも大切な活動である。また、英文の内容を具体的に理解させるために、that などの代名詞が表している内容を正確に読み取らせる指導が大切である。例えば、教科書の本文の内容を確認させる際、英文の意味だけの確認で終わることがないように、代名詞の表す内容を問う発問を取り入れるのも一つの方法である。読み物に関する教材に触れる機会があまり多くない場合でも、対話文の教材の中から代名詞の表す内容を具体的に答えさせたり、リスニングの指導において、具体的な内容を答えさせたりする活動を行うことができる。さらに、China と Canada の勘違いや、right と left の勘違いなどを避けさせるために、日頃から集中して学習活動に取り組みさせることが大切である。例えば、自分の考えなどを明確にするために、自分の作った文やスピーチについて、他の生徒から質問してもらったり、設問の答えを文中で確認させる機会を設けたりすることも一つの方法である。



# 中学校学習状況実態調査





# 1 調査内容

学習や生活についてのアンケート(           立           )中学校 男・女

この調査は、みなさんの普段の学習や生活の状況と興味・関心等について調べるものです。ありのままに、思ったとおりを教えてください。また、すべての質問に答えるようにしてください。

- 1 各教科等についての興味・関心、理解について、あなたの思いに最も近いものを、次の ~ の4段階の中から1つずつ選び、その番号を教えてください。

興 味 関 心	興味・関心がある	理 解	理解できている
	まあまあ興味・関心がある		だいたい理解できている
	興味・関心があまりない		あまり理解できていない
	興味・関心がない		理解できていない

教 科	興 味 ・ 関 心	理 解	教 科	興 味 ・ 関 心	理 解
国語			音楽		
社会			美術		
数学			保健体育		
理科			技術・家庭		
英語			総合的な学習の時間		

- 2 授業がよく分かるときは、どんな授業のときですか。次の中からあてはまるものをすべて選び、その番号を教えてください。いくつ書いてもかまいません。その他の場合には、具体的に( )の中に入れてください。

先生が一人で学級のみなを教える授業 先生が何人かで学級のみなをいっしょに教える授業 学級がいくつかに分かれて、先生がそれぞれについて教える授業 コンピュータを使った授業 実際に物を使って考える授業 グループで話し合いながら考える授業 自分でノートをまとめながら考える授業 ワークシートに記入しながら考える授業 A L Tなど外国人の先生が教科の先生といっしょに教える授業 その他 ( )
--

--

- 3 学習内容で分からないことがある場合、あなたはどのようにしていますか。次の中から最もあてはまるものを1つ選び、その番号を教えてください。

自分で解決しようと努力する 保護者や兄姉に聞く 塾の先生に質問する	友人に聞く 学校の先生に質問する そのままにしておく	
---	----------------------------------	--

- 4 どのように自宅学習をしていますか。(1)~(4)について、次の中から1つ選び、その番号を教えてください。

必ずする	時々する	あまりしない	全くしない
------	------	--------	-------

- (1) 授業の予習  
 (2) 授業の復習  
 (3) 出された宿題  
 (4) その他の学習

(1)		(2)		(3)		(4)	
-----	--	-----	--	-----	--	-----	--

- 5 全教科合わせて、1日あたりどの程度自宅学習をしていますか。(1),(2)について、次の中から1つ選び、番号で教えてください。学習塾での学習時間は除いて教えてください。

ほとんどしない	30分程度	1時間程度
1時間30分程度	2時間程度	2時間30分程度
3時間程度	3時間30分程度	4時間程度
5時間程度	6時間以上	

- (1) 授業がある日  
(2) 学校が休みの日

(1)	
(2)	

- 6 学習塾について聞きます。

- (1) あなたは学習塾に通っていますか。通っていれば、1週間に何日通っていますか。次の中から1つ選び、教えてください。

通っていない	1日	2日	3日	4日以上
--------	----	----	----	------

--

- (2) あなたは学習塾で、1回にどのくらい勉強していますか。次の中から1つ選び、教えてください。(1)で と答えた人は、答える必要はありません。

30分程度	1時間程度	1時間30分程度
2時間程度	2時間30分程度	3時間程度
3時間30分程度	4時間以上	

国語		社会		数学		理科		英語	
その他									

- 7 読書について聞きます。

- (1) 読書をするのは好きですか。次の中から1つ選び、教えてください。

とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	嫌い
-------	--------	-----------	----

(1)	
-----	--

- (2) 平均して1か月あたり、何冊くらい本を読んでいますか。  
(まんがは除く)

(2)		冊
-----	--	---

- 8 学校が休みの日に何をしておすごすことが多いですか。次の中から3つ選び、その番号を教えてください。その他の場合には、具体的に( )の中に書いてください。

勉強	読書	部活動	地域の活動	ボランティア活動
家族とのふれあい		友人との遊び	家の手伝い	
その他 ( )				

--	--	--

## 2 調査結果及び結果分析

[調査人数 1850名]

(各学校1クラス5名を抽出して調査した)

数値は、全回答数に対する割合(%)である。

無回答や回答が不明なものがあるので、それぞれの質問に対する回答の和は100%にならない。

1

各教科に関する 興味・関心	ある	まあまあある	あまりない	ない
国語	19.8	51.2	24.5	4.2
社会	27.8	45.4	20.1	6.6
数学	26.6	43.4	24.4	5.5
理科	32.2	44.8	18.8	4.1
英語	30.9	38.7	22.4	7.8
音楽	39.2	35.7	18.4	6.6
美術	35.0	39.0	19.8	6.1
保健体育	38.4	41.1	15.5	4.8
技術・家庭	39.4	40.9	14.9	4.8
総合的な学習の時間	33.9	43.1	16.1	6.5

各教科に関する 理解	理解できている	だいたい理解できている	あまり理解できていない	理解できていない
国語	17.5	58.2	20.9	3.3
社会	18.5	48.3	26.1	7.0
数学	26.8	42.1	23.8	7.2
理科	25.6	46.8	22.6	4.9
英語	22.4	40.1	27.3	10.1
音楽	31.0	45.4	17.8	5.7
美術	32.6	43.8	19.1	4.4
保健体育	28.5	49.1	17.9	4.3
技術・家庭	36.9	45.4	14.3	3.3
総合的な学習の時間	36.1	46.4	13.9	3.2

・各教科等に関する「興味・関心がある」と「まあまあ興味・関心がある」の合計は、すべてにわたってほぼ7割以上であり、昨年度の6割以上よりも高くなっている。  
 ・各教科等に関する理解について、全教科の「理解できている」と「だいたい理解できている」を合わせた割合の平均は74%となり、昨年と同様の傾向である。今後も生徒がわかる授業となるように、きめ細かな指導を行う必要がある。

2

授業がよくわかるときは、どんな授業のときですか。	
先生が一人でみんなを教える授業	31.3
先生が何人かでみんなを一緒に教える授業	21.9
学級がいくつかに分かれてする授業	49.7
コンピュータを使った授業	45.9
実際に物を使って考える授業	62.6
グループで話し合いながら考える授業	40.8
自分でノートにまとめながら考える授業	30.9
ワークシートに記入しながら考える授業	32.8
ALTなど外国人の先生が教科の先生と一緒に教える授業	33.1
その他	3.0

・「実際に物を使って考える授業」がよく分かったと答えた割合が昨年度と同様にもっとも高かった。教材・教具を工夫し、生徒の感覚を通して理解を深める指導に効果があると思われる。  
 ・「学級がいくつかに分かれてする授業」の回答率が昨年度と同様に高く、少人数によるきめ細かな指導が生徒にとって、学習内容を理解することに効果的であると考えられる。  
 ・「コンピュータを使った授業」は昨年度と同様に高く、生徒が学習内容を理解するために役立っていると思われる。  
 ・「グループで話し合いながら考える授業」も4割を超えている。

学習内容でわからないことがある場合の解決方法				
自分	友人	保護者や兄弟	学校の先生	塾の先生
17.9	38.9	14.6	9.0	7.5
そのまま				
4.3				

・昨年度に比べて「学校の先生」2.5ポイント、「塾の先生」2.4ポイント、尋ねる割合が低くなっている。学校においては、生徒が質問しやすい雰囲気づくりや個に応じた指導を充実することが大切である。  
 ・「友人」に尋ねる割合は昨年度と同様で、「そのままにしておく」とする割合はマイナス1.4ポイントであった。分からないところをそのままにしておく傾向は低くなっていると考えられる。

自宅学習時間	必ずする	時々する	あまりしない	全くしない
(1) 予習	4.7	33.5	39.4	22.3
(2) 復習	26.6	49.1	17.5	6.6
(3) 宿題	63.4	28.5	5.9	2.1
(4) その他の学習	13.2	41.7	31.8	13.2

・「宿題を必ずする」割合が6割を超え、「あまりしない」と「全くしない」の合計が8%で昨年度と同程度である。さらに、家庭学習の習慣付けの指導の一層の充実が望まれる。  
 ・「予習」や「復習」については、「必ずする」「時々する」の割合が昨年度とほぼ同じであった。

自宅学習時間	ほとんどしない	30分程度	1時間程度	1時間30分程度
(1) 授業がある平日	8.8	15.8	28.4	23.6
(2) 学校が休みの日	9.5	8.4	18.4	17.6
自宅学習時間	2時間程度	2時間30分程度	3時間程度以上	
(1) 授業がある平日	15.8	4.3	3.2	
(2) 学校が休みの日	23.7	8.6	13.7	

・平日「1時間30分程度」学習している生徒の割合が、昨年度と比べて約3ポイント、学校が休みの日「2時間程度」学習している生徒の割合が、昨年度と比べて約2ポイントそれぞれ高くなっており、自宅学習が充実してきていると考えられる。

6

(1)通塾状況				
通っていない	1日	2日	3日	4日以上
63.8	4.1	16.2	12.8	2.2

(2)塾における1回当たりの学習時間	30分程度	1時間程度	1時間30分程度	2時間程度
国語	7.6	6.9	2.0	0.8
社会	6.1	7.8	2.1	0.6
数学	3.6	12.9	5.9	1.9
理科	6.0	7.9	2.8	0.9
英語	4.2	13.1	7.4	3.6
その他	0.5	0.6	0.3	0.4

(2)塾における1回当たりの学習時間	2時間30分以上	3時間程度以上
国語	0.2	0.1
社会	0.2	0.1
数学	1.4	0.2
理科	0.3	0.1
英語	1.0	0.5
その他	0.1	0.0

・4割弱の生徒が通塾し、その3割弱が週2～3日と、昨年度とほぼ同じ傾向にある。  
 ・塾での学習時間は、昨年度と同様、数学と英語の占める割合が高く、いずれも「1時間～2時間程度」の時間が多く、数学で約21%、英語で約24%である。

7

読書をすることは好きですか。			
とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	嫌い
30.9	42.6	19.0	6.5

1ヶ月あたりの読書冊数				
読まない	1冊	2冊	3冊	4冊
15.7	35.0	22.5	12.3	3.8
5～10冊	10冊より多い			
6.6	3.4			

・読書をするということについて「とても好き」「まあまあ好き」を合わせた割合が約74%で、読書に対する関心が高いと思われる。  
 ・読書量については、1ヶ月当たりの読書冊数は1、2冊読む割合が最も多く、全体の約58%であった。

8

休日の過ごし方				
勉強	読書	部活動	地域の活動	ボランティア活動
40.4	18.8	83.3	0.9	1.1
家族と	友人と	家の手伝い	その他	
26.6	78.1	17.5	18.3	

・「部活動」が8割強、「友人との遊び」が8割弱と高い傾向は、昨年度と同じであった。  
 ・「勉強」をして過ごす割合が昨年度と比べて4ポイント高くなっている。  
 ・「家の手伝い」が昨年度と同様、2割に満たない状況にあり、家庭での過ごし方について考える必要がある。

